平成28年（2016年）熊本地震
支援活動報告書

結

国士舘大学
Kokushikan
防災・救急救助総合研究所

目　次

Ⅰ．はじめに

平成 28 年熊本地震(2016 年)災害ボランティアの視察を終えて

防災・救急救助総合研究所　所長　島崎修次　1

災害ボランティアに対する国士舘大学の防災教育

防災・救急救助総合研究　所員　田中秀治　2

平成 28 年熊本地震における国士舘大学復興支援ボランティア活動の拠点

玉名温泉街 地域振興会 HOT ほっとアベニュー　会長　坂梨誠一　5

Ⅱ．平成 28 年(2016 年)熊本地震への被災地支援活動

1，熊本地震における国士舘大学災害ボランティアチームの活動報告

大学院救急システム研究科　助手　植田広樹

防災・救急救助総合研究所　職員　上杉純平　6

2，国士舘大学災害ボランティア先遣隊の支援活動について

体育学部スポーツ医科学科　助手　坂梨秀地　12

3，西原村古閑地域の倒壊家屋の瓦礫撤去作業

防災・救急救助総合研究所　所員　高橋宏幸　16

4，熊本県庁医療救護班災害対策本部視察および益城町ボランティアセンター支援

防災・救急救助総合研究所　職員　月ヶ瀬恭子

防災・救急救助総合研究所　職員　岩田彩奈　22

5，南阿蘇村ボランティアセンター運営支援活動

防災・救急救助総合研究所　所員　永吉英記　27

6，西原村立山西小学校避難所の支援

防災・救急救助総合研究所　職員　久保木翔大

体育学部スポーツ医科学科　ＯＢ　三島大史　33

7，国士舘大学災害ボランティアチームの拠点場所（玉名市）コーディネート

体育学部スポーツ医科学科　助手　坂梨秀地　38

Ⅲ．ボランティア参加学生レポート　34 名

1，被災地での学生ボランティア活動報告

大学院救急システム研究科 修士課程１年　井上拓訓

体育学部スポーツ医科学科　4 年　星野元気　41

2，西原村ボランティアセンターにおける子ども達の支援について

体育学部スポーツ医科学科　3 年　沼田浩人

体育学部スポーツ医科学科　3 年　組澤光一　45

3，ボランティア活動を通して

体育学部スポーツ医科学科　25 名

体育学部体育学科　1 名

体育学部こどもスポーツ教育学科　1 名

法学部法律学科　2 名

法学部現在ビジネス法学科　1 名　48

Ⅳ．国士舘大学災害 災害ボランティア活動資料　68

Ⅴ．活動記録写真集　75

平成 28 年（2016 年）熊本地震災害ボランティア派遣の視察を終えて

防災・救急救助総合研究所

所長　島崎　修次

このたびの熊本地震（2016 年）は、九州地方では初めて震度 7 を観測し、熊本県や大分県では甚大な被害が発生、特に熊本県の上益城郡益城町の役場周辺、阿蘇郡西原村の古閑地区の被害は惨憺たるものでした。

当研究所では、第 1 次災害派遣として 4 月 16 日（土）の本震発生直後に、現地からの要望もあり、御船町の御船小学校に開設された避難所に、飲料水、食料、ブルーシートを届け感謝されました。

また、第 2 次災害派遣として、4 月 28 日から 5 月 5 日までの 8 日間、ゴールデンウイークの休日を利用して、教職員 9 名、学生 34 名によるボランティア派遣を実施いたしました。

本職は4月30日に、現地に赴き被害状況の調査と本学学生の活動状況を視察しましたが、学生ボランティアは精力的に割り当てられた作業に取組んでいました。作業は大きく次の 5 項目になっており、益城町では、①簡易ベットの組立て作業、西原村では、②被災された方々の子供たちのお世話、③避難所のお手伝い、④支援物資の整理、⑤瓦礫の撤去等、疲れも見せず頑張っていました。これらの活動は、現地のメディアの取材を受けたこともあり、ボランティア活動の励みになったと思われます。これまでの東日本大震災、伊豆大島・広島の土砂災害、常総市の大雨洪水被害等におけるボランティアも今回の活動につながっていると思われました。

今回の視察を通して感じたことは、実際に災害が発生した時には、全国から数多くの支援物資やボランティアの方たちがやってくるのですが、それをコントロールするシステムがまだまだ十分でないため、ある部署では混乱をきたしているように見受けられました。やはり災害発生時に、円滑な運営が図れるシステムの構築が早急にできなければならないと痛感しました。災害活動時の CSCA、（①Command and Control：指揮統制と組織命令系統　②Safety：安全確保　③Communicatinn：連絡、情報収集と連携　④Asessment：評価）の重要性をあらためて感じました。

近年、日本列島では、地震、火山の噴火、大雨洪水被害等の自然災害が頻発しており、関東でも首都直下型地震や南海トラフ地震が危惧されていますが、その時に指揮命令ができる人材の養成や災害に役立つ運営システムの構築が喫緊の課題であり、その対策に向け研究をして行かなければならないと考えています。

災害ボランティアに対する国士舘大学の防災教育

国士舘大学防災・救急救助総合研究所

所員 田中　秀治

はじめに

国士舘大学は創立以来 100 年に亘り、地域に貢献できる人材養成を建学の理念に掲げ、幅広い知識と地域に貢献する技術をもった学生の人材育成に努めてきた。

しかし、平成 23 年 3 月 11 日に東日本で発生した未曾有の大震災を契機に、改めて現代において国士舘大学が標榜する「人のために為す、地域のために為す」人材育成の重要性を痛感した。

これまで国士舘大学は活学を実践することを目的に、体育、スポーツ教育、武道教育を中心に行ってきたが、最近では救急救命士の病院前救急医療教育や、防災教育を大きな柱として掲げることになった。この契機となったのが前述した東日本大震災である。震災直後には、大学で所有する救急車を活用し、宮城県内の石巻や南三陸、気仙沼など医療支援を行えない数カ所の地域において医療支援活動を行った。また、都内においても東京都保健衛生局の指示により、東京武道館・味の素スタジアムにおいて避難民の方々の健康・生活支援などを約 3 ヶ月間行った。これを機に、本学は災害教育の重要性に着目するようになった。

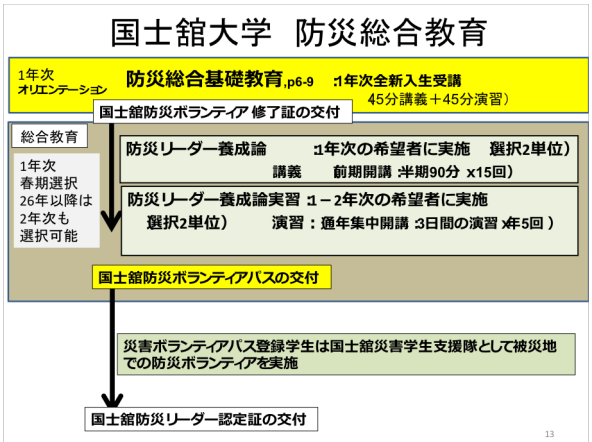
現在大学のメインキャンパスのある世田谷では、来たる大震災に備え、世田谷区の災害時の第二順位避難所として「災害時における協力体制に関する協定書」を締結（平成 20 年 3 月）するとともに、近隣の若林町会とは「震災時の活動支援に関する覚書」を締結（平成 21 年 3 月）しており、発災時には 2 次避難所として施設の提供、救護機材、食料、物資の提供を行う事になっている。また、日本赤十字社との連携、日本ＤＭＡＴとの連携を視野に入れ、民間防災機関としての体制を整えている。

国士舘大学防災リーダー養成の開始

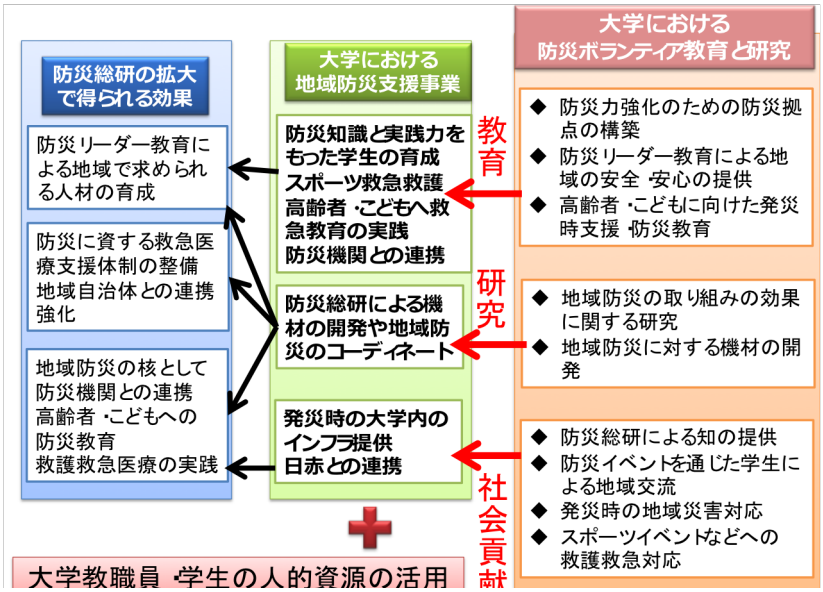
このような東日本大震災の活動の結果を踏まえ、大学内で様々な議論ののち、大学の方

針として、2013 年に防災拠点大学構想を掲げた。2013 年には新入生約 3,100 名を対象に防災教育を行い、震災にあっても　あわてず、落ち着いた行動ができるように、避難訓練や防災教育さらには防災リーダー養成教育が始められた。

新入生に対する防災教育は、都心部に直下型地震が発生した際、すべての学生が正しい初期行動をとれるように防災に関する e ﾗｰﾆﾝｸﾞの学習と、実技として、けが人への応急手当、CPR と AED の使用、そして毛布や人による搬送などを実施した。さらには災害が起きたとき大勢の人が一度に避難すると混乱が起き、「避難する人が将棋倒しになる」、「避難に時間がかかり逃げ遅れ、倒壊する建物の下敷きや火災被害にあう」など二次災害のリスクが増えるために、その場でコントロールができる防災リーダーを育成し、リーダーに従って避難を行うことで大学の人的被害を最小限にとどめることを目標としている。



また更なる防災や災害の対応について在学中に知識を希望するものには、防災リーダー養成論や防災リーダー養成実習として災害の専門家によるオムニバス式の選択授業を取得することができるようになっている。これらの講義と演習に合格した者には、ボランティアパスを発行し地域の災害訓練への参加や将来の防災リーダーとして積極的に地域への貢献やボランティアに参加する機会を得ることが可能である。実際にこの教育で育成された学生が、2012 年には茨城の竜巻災害や 2013 年の大島の土石流被害、2015 年の茨城県豪雨災害、そして 2016 年の熊本地震などで、災害現場へ派遣されボランティア活動も行った。



災害時のボランティアを経験して防災教育の重要性を理解

国士舘大学に入学する学生の多くは公務員を目指す。とくに消防官、警察官、自衛隊、体育教員を目指す学生にとって、災害時のボランティアを経験することで命の大切さを改めて実感する経験は、将来の職務に関わる極めて重要であることが東日本大震災のボランティア活動を通じて明らかになった。

まず、災害現場でボランティアをすることによって、災害時の対応を理解する事が可能であり、大学生という身分でありながら発災時に地域の人々の苦しみを理解し、社会人になるための礼儀や立ち居振る舞いを身につける事が出来る。いわゆる災害現場におけるインターンシップである。このような経験は公務につく者や人の命に関わる者であれば、必ず身につけておくべきものであり、将来公務員を目指す者として、地域自治体で災害対応を行うものには必須であると考える。また、災害現場において被災者や家族から信頼を得ることは重要な経験である。学生達が災害時にボランティアで被災者の方と接することは、将来、彼らが救急現場で傷病者とコミュニケーションを取るために良いトレーニングともいえる。特に災害現場においては災害弱者、高齢の患者や子供、その家族に対して、様々な状況が発生し症状や必要な処置・その時に考えられるリスクについて簡単に説明する必要があり、そのようなプレゼンテーション能力を得るためにも、このような経験は有用と考える。

更に学生達が災害ボランティアとして、活動できることは、その地域の被災した方々の思いを知ることとなり、自身が就学するモチベーションになる。実際にボランティアに積極的に参加する学生は、学校の授業や実習でも熱心に取り組む姿が多く見られている。そして、今回の熊本地震災害ボランティア活動では、参加した学生全員が防災リーダー養成論実習を受講しており、その実習を通じて学んだことを、現場で活かされていたことが明らかである。

国士舘大学の学生は、一般に体力や上下社会の厳しさゆえに体育会系といわれるが、現在では、国士舘大学は 7 学部 15 学科を有する地域に根ざしたグローバルユニバーシティーであり、旧来のイメージとは一新され未来指向の大学となっている。されど建学の精神は脈々と根付いており、さらに規律の重要性を知り、体力を秀でる学生を輩出することは、国士舘大学が社会に貢献できる方法である。被災地へのボランティアとして、First Responder として医学的知識と実施できる決断力をもった学生教育を行うこと、また、災害ボランティアは実践的な応急手当の高い能力を錬成するような教育体制の構築を行っていく所存である。

平成 28 年熊本地震における国士舘大学復興支援ボランティア活動の拠点

―玉名 BASE－　地区災害コーディネーター
玉名温泉街 地域振興会 HOT ほっとアベニュー
会長　坂梨誠一

この度の熊本地震にあたり、どこよりも早い時期に国士舘大学の皆様に支援活動をしていただきありがとうございました。

私の、息子（坂梨秀地）が貴学に勤めさせていただいているご縁から、玉名を活動の拠点としたい旨の申し出があり、お世話をさせていただく事となりました。

私どもも非常時の中、不慣れでもあり、不安だったのですが、玉名温泉組合をはじめ、地域の方々が我々の想いを、ボランティアの学生さんを通して伝えてもらいましょうと、協力を申し出て下さった事は大きな力となりました。

我々熊本人は、これまで何の根拠もなく、熊本には地震は起きないと思っていました。しかし、田中教授より、「日本は、火山のある島国です。いつどこで、何があっても不思議ではありません！！だから、救急救命なのです。」と言うお言葉を聞き何の覚悟も出来ていない私の心に響きました。

被災地の方々や、ボランティアに行かれた方々から、国士舘大学のボランティアチームは、すごいよと言っていただき、自分のことの様に嬉しく思いました。

学生の皆さんの今後のご活躍と国士舘大学のますますのご発展を心よりお祈り申しあげます。

私達も美しい熊本の復興のため頑張ります。

今度は、是非あそびに来て下さい。あなたが汗を流してくれた熊本へ

Ⅱ．平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

1，熊本地震における国士舘大学災害ボランティアチームの活動報告

大学院救急システム研究科　助手
植田　広樹
防災・救急救助総合研究所 職員
上杉　純平

Ⅰ．　ボランティア活動の背景

平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分、熊本県で地震が発生（平成 28 年（2016 年）熊本地震と政府が命名）。地震の規模（マグニチュード）は 6.5。熊本県益城町宮園では震度 7 を観測、その後 6 弱以上の地震は計 6 回観測している。

地震発生直後の 14 日 22 時 52 分に国士舘大学防災・救急救助総合研究所（以下、当研究所と記す）熊本地震災害対策本部を設置した。当研究所の活動概要の時系列を表 1 に示す。翌 15 日 8 時 15 分、第 1 回国士舘大学防災・救急救助総合研究所災害対策本部会議を開催し、学生ボランティア派遣の決定と活動日程の検討をした。

16 日 1 時 25 分、熊本県熊本地方でマグニチュード 7.3・最大震度 7 の地震発生。気象庁の会見により、14 日の地震は前震であり、16 日の地震が本震の可能性があると発表された。この一連の地震により人的被害 死者 49 名、重症 372 名、軽症 1,312 名。住家被害 全壊 7,996 棟、半壊 17,866 棟、一部破損 73,035 棟の被害の報告がされている ※5 月 24 日現在（東京消防庁）。

本震に伴い、当研究所では緊急会議を開き、16 日に現地視察・支援物資輸送を目的に本学の教職員による第 1 次災害派遣を行うことが決定した。

また、19 日に「熊本地震・支援団体火の国会議」から活動依頼書が当研究所に届いた。熊本県西原村にボランティアセンターが設置されるため、ボランティアの協力要請であった。翌 20 日に教職員と学生による、第 2 次災害派遣を行うことが決定。さらに、ボランティア活動は西原村を拠点とすることに決定した。

その後、阿蘇市の東側に接する大分県竹田市から当研究所に協力要請があり、竹田市ボランティアセンター設置に伴い、運営支援を実施するため、5 月 12 日に第 3 次災害派遣が決定した。

表 1　地震発生から当研究所の活動概要時系列

2016/4/14	21:26	熊本県熊本地方でマグニチュード6.5・最大震度7(熊本県益城町)の地震発生
	22:52	国士舘防災・救急救助総合研究所　災害対策本部設置
2016/4/15	8:15	第1回防災総研災害対策本部会議開催（災害ボランティア派遣の有無について）
	9:00	災害ボランティア活動に向け、現地の情報収集、移動手段やボランティアの応募など作業開始
	10:43	国士舘大学防災総研対策本部連絡 グループ作成(Facebook)
2016/4/16	1:25	熊本県熊本地方でマグニチュード7.3・最大震度7の地震発生
	10:00	先遣隊の派遣・活動内容決定について
	13:04	先遣隊、国士舘大学多摩校舎から熊本県に向けて出発（永吉先生、坂梨先生）
2016/4/17	7:45	先遣隊、熊本県上益城郡御船町　御船町立御船小学校（避難所）に到着
2016/4/18	4:05	先遣隊、国士舘大学多摩校舎に到着・解散
2016/4/20	11:00	第2回防災総研災害対策本部会議開催（災害ボランティア派遣の活動について）
2016/4/21	16:36	学生ボランティアの募集開始
2016/4/22	18:51	学生ボランティア募集終了
2016/4/26	17:20	防災総研熊本地震災害ボランティア専用のTwitter開始
2016/4/27	18:25	災害ボランティア第二次派遣隊 スタッフ最終決定
2016/4/28	17:45	第2次派遣隊、多摩キャンパスを出発
2016/4/29	16:10	熊本県玉名市（ベースキャンプ地）到着
2016/4/30~2016/5/4		ボランティア活動
2016/5/4	8:45	多摩キャンパスに向けて出発
2016/5/5	9:15	第二陣、国士舘大学多摩校舎に到着・解散
2016/5/14	22:00	第三陣、大分県竹田市に向けて国士舘多摩校舎を出発
2016/5/15	12:00	大分県竹田市ボランティアセンター到着、活動開始
2016/5/19	13:00	活動終了、多摩キャンパスに向けて出発
2016/5/20	3:45	第三陣、国士舘大学多摩校舎に到着・解散

Ⅱ．　学生ボランティア派遣の組織構築と参加手続き

当研究所では第 2 次災害派遣として、学生ボランティアの派遣を決定し、4 月 28 日（木）から 5 月 5 日（木）までの 8 日間、現地で活動することになった。本学の「防災リーダー養成論実習」を受講した学生を対象に、募集を開始した。参加希望者には自然災害に対応したボランティア保険に加入すること、リスクが伴うことの説明を行った上で、本人と保護者の同意を得るため「学生ボランティア参加同意書」（図 1）を当研究所事務局に提出させ、手続きを行った。

図１　学生ボランティア参加同意書

保護者の皆様に同意書ご署名のお願い

学生が災害ボランティアに参加するためには、保護者の方の同意書が必要になります。国士舘大学 防災・救急救助総合研究所は、熊本地震災害ボランティアを派遣するにあたり、派遣先の組織・地域とも連携して最善を尽くすことをお約束いたします。しかしながら、被災地では余震が続き、二次被害の危険性も懸念されています。現段階では、それらの安全性を確約することはできませんが、そのことを踏まえ、被災地でのボランティアに参加希望の学生の方は、以下の同意書に保護者の方から許可と署名をいただくようお願い申し上げます。なお、参加者全員ボランティア保険には加入していただきます。

２０１６年４月
国士舘大学　防災・救急救助総合研究所
所長　島崎　修次

国士舘大学　防災・救急救助総合研究所
所長　島崎　修次　殿

学生ボランティア参加同意書

２０１６年　　月　　日

私は下記の４事項を理解し、自発的な意思に基づいて熊本地震被災地支援ボランティア活動に参加します。
1) 危険性を十分理解したうえで、国士舘大学防災・救急救助総合研究所の活動目的・行動指針を共有し、その目標追及のために活動します。
2) 災害伝言ダイヤルにて設定する電話番号を家族と共有し、家族と毎日連絡を取ります。
3) 心身ともに良好な健康状態で、円滑なコミュニュケーションがとれる状態で活動に参加します。
4) 活動を通じて知り得た情報等の機密を保持し、ボランティア終了如何に関わらずそれらの情報を他に提供しません。

参加者氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

上記の者が、熊本地震被災者支援に係るボランティア活動において、さらなる天災による被害、ならびに活動中において起こり得る被害に対して、上記の者の保護者として、一切の補償を国士舘大学　防災・救急救助総合研究所ならびに派遣先の組織等に求めることはありません。また、それらの危険性を了承したうえで、上記の者の参加に同意いたします。

保護者氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

－－－－－－－－－－－－－－－　キリトリ線　－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

ボランティア活動参加同意書（控）

年　　月　　日

氏名
フリガナ
住所
連絡先　携帯
E-mail アドレス
※本同意書は国士舘大学防災・救急救助総合研究所にて管理し、当該活動以外の目的では使用いたしません。

FAX 送付先：国士舘大学　防災・救急救助総合研究所　　FAX 番号：042-339-7191

Ⅲ.　ボランティアまでの準備・装備

今回、学生の募集人数は 34 名に設定した。この人数設定は、熊本まで移動に使用する車両は 5 台（10 人乗りハイエース 3 台、10 人乗りキャラバン 1 台、トラック 1 台）で、乗車可能人数が 43 名であり、被災地で続く余震に備えて参加者全員が車両で避難できる態勢を確保するためであった。最終的には、派遣チームは学生 34 名、教職員 7 名、大学 OB・OG2 名の計 43 名で活動することになった。ベースキャンプ地は、本学のスポーツ医科学科の坂梨教務助手の実家である、玉名市の玉名温泉地区公民館、河崎区公民館、坂梨教務助手の実家（女子のみ）となった。さらに、坂梨教務助手の父、坂梨誠一様のご協力により、食事や入浴の手配等の現地コーディネートをして頂いた。

円滑に指揮命令、情報共有が行われるように、組織を編成した（図 2）。国士舘防災総研東京本部、現場統括指揮官、行動実行部長、さらに学生 34 名を 6 班に分け、班の中でも班長や食事係など、参加者全員に役割を与えた。

活動時に使用するための装備として台車、スコップ、寝袋、毛布などを用意し、当研究所のトラックで現地まで搬送した。さらに、車での移動中や活動時の連絡体制を緊密にするため、IP 無線を用意した。IP 無線は、携帯電話網のデータ通信機能を使用しているため、東京本部の指示を即時に仰ぐことが可能になった。

さらに東京から熊本までの高速道路の経路（図 3, 4）、交通情報、現地病院情報、熊本県内のボランティアセンター情報、Google フォームを用いたクロノロジー入力準備等を、参加する学生に呼びかけて事前準備を行った。

図 2　国士舘災害ボランティアチーム組織図

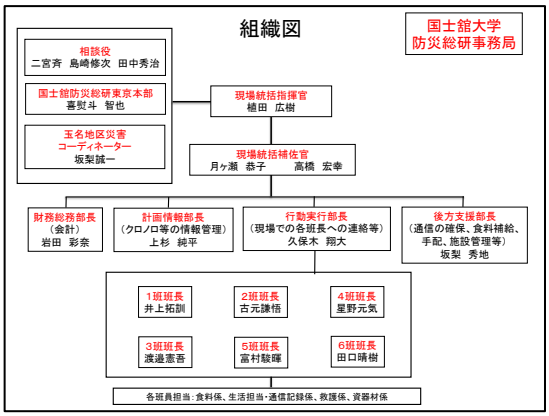


図３　高速道路の交通経路(SA, PA の情報)

SA・PA(往路：国立府中IC～植木IC)						
総距離：1165.8ｋｍ　予測所要時間：12時間58分　料金24,980（ＥＴＣ16,420）						
路線名	エリア名	ガスステーション	フードコート	コンビニ	ATM	記録欄
中央自動車道	石川ＰＡ	×	○ ２４Ｈ	○ ミニマート（２４	○ ２４Ｈ	
八王子ＪＣＴ↓26分（33.1ｋｍ）						
圏央道	厚木ＰＡ	×	○ 6時～23時	×	○ ２４Ｈ	
↓19分（28ｋｍ）						
東名高速道路	中井PA（下り）	×	○ 24H	○ ファミリーマート(24H)	○ 24H	
↓14分（18.2ｋｍ）						☆約1時間(85.8km)
東名高速道路	船沢PA（下り）	×	○ 7:00～19:30	×	×	
↓6分（9ｋｍ）						
東名高速道路	EXPASA足柄（下り）	○ 24H	○ 24H	○ ファミリーマート(24H)	○ E-net:24H／セブン銀行:24H	
御殿場ＪＣＴ↓17分（26.1ｋｍ）						
新東名高速道路	NEOPASA駿河湾沼津（下り）	○ 24H	○ 24H	○ ミニストップ(24H)	○ 24H	
↓18分（31.2ｋｍ）						
新東名高速道路	NEOPASA清水（下り）	×	○ 24H	○ ミニストップ(24H)	○ 24H	
↓17分（27.8ｋｍ）						☆約2時間(179.9km)
		○	○	○	○	

図 4　多摩校舎から玉名市までの交通経路

Ⅳ.　被災地までの移動

国士舘大学多摩校舎から活動現場まで（写真 1, 2）移動の時系列を表 2 に示す。4 月 29 日、玉名市に活動拠点を置き、その後西原村ボランティアセンター内で行われる会議に参加するため、教職員 4 名が向かった(写真 3, 4)。会議では、当日の活動報告と翌日の活動内容が協議されていた。その日は、西原村ボランティアセンターが開設された日であり、活動初日であったため、ニーズ調査が重要な課題でもあった。会議後、ボランティアセンターの職員から、明日からの活動内容を伝えられ、ボランティアセンター本部支援、避難所支援、こども支援、瓦礫撤去などの活動が決まった。また、福島県立医科大学附属病院の中島成隆先生から当研究所に電話連絡があり、熊本県庁内に設置されている医療救護班災害対策本部の視察、熊本県益城町ボランティアセンターの支援を行うことになった。

写真 1　大学出発前

写真 2　熊本への移動中

表 2　国士舘大学多摩校舎から活動現場までの時系列

2016/4/28	10:00 第2次派遣隊、出発準備開始（支援物資のトラック搬入など）
	16:45 出発前のオリエンテーション開始
	17:45 第2次派遣隊、多摩キャンパスを出発
	18:50 国立府中IC到着
	19:50 足柄SA(静岡県)にて夕食
2016/4/29	7:41 小谷SA(広島県)にて朝食
	13:09 壇ノ浦SA(山口県)に昼食
	15:09 大分県中部地方でマグニチュード4.5・最大震度5強の地震発生
	16:10 拠点ベースの玉名市、つかさの湯駐車場到着
	16:33 統括本部、西原村ボランティアセンターに向けて出発
	18:01 西原村ボランティアセンター到着、会議出席

Ⅴ.　ボランティア活動の実態

4 月 30 日（土）から 5 月 3 日（火）の 4 日間、班ごとに分かれて、熊本県西原村、益城町でボランティア活動を実施した（図 5）。

今回の活動では、5 箇所で同時に活動しており、各活動エリアの情報収集や指揮命令・統制を行うため、西原村ボランテ

ィアセンター内の空きスペースを借りて、国士舘大学ボランティアチームの統括本部を設置した。主にボランティアセンターからのニーズ調査、活動場所への派遣人数の調整、各活動場所への連絡体制の構築、各活動場所のクロノロジー作成（図6）などのロジスティクス面での活動となった。この統括本部には、学生も参加し、現場以外での支援活動を経験した（写真5.6）。

西原村での活動は、ボランティアセンターからの指示により、西原村中学校、山西小学校に開設された避難所で、支援物資の搬入・仕分け、炊き出し、配膳の補助、交通整理、避難所内の掃除等を行った。また、古閑地域や河原小学校周辺地域の倒壊した家屋の瓦礫撤去作業、被災された方々のこども達の支援、そして西原村ボランティアセンター本部の支援として、ボランティア参加者の情報の PC 入力作業を行った。

益城町での活動は、益城町避難所対策本部の益城町公民館で、避難所の避難者向けに企画された「リフレッシュ避難」の運営事務や、益城町ボランティア運営スタッフの活動記録作成（クロノロジーなど）を行った。避難所の支援としては、避難所を巡回して避難者のニーズ調査や、掃除、物品整理、そして新たな避難所の設営として、簡易ベッド（ダンボールベッド）作成・運搬、パーテション・カーテンの作成等を行った。

なお、4 月 30 日から 5 月 1 日の 2 日間、被害状況と本学学生の活動状況を把握することを目的に、当研究所の島崎修次所長と田中秀治所員が被災地を訪問した（写真 7, 8）。

写真 3　西原村ボランティアセンター入口

写真 4　ボランティアセンター会議前

図 5　4 日間の活動マップ

図 6　各活動場所のクロノロジー

5月2日益城町班			
時刻	現在地	内容	備考
7:47:00	玉名ベース	玉名ベース出発	
9:02:00	益城町	益城町到着	
9:05:00	益城町公民館	益城町公民館出発	
9:13:00	戸島西2	給油	
9:45:00	戸島西2	給油終了	給油 45.06L5002円〔1L111円〕
9:50:00	玉名ベース	玉名ベース到着	
10:10:00	輝らめき館	ダンボールベット作成	
10:18:00	益城町役場	益城避難所対策チームで リフレッシュ避難所企画の参加者へ電話連絡 クロノロ記入	
11:27:00	益城避難所対策チーム	昼食、休憩	
12:10:00	益城避難所対策チーム	電話対応活動再開	
12:30:00	益城避難所対策チーム	本日の活動終了、玉名市へ移動開始	
16:30:00	益城町	益城町出発	
16:30:00	輝らめき館	輝らめき館到着	
17:00:00	玉名市	玉名市到着	
17:13:00	輝らめき館	輝らめき館出発 福田分館へ	物資引き取り
18:20:00	輝らめき館	作業中断 待機	
18:25:00	輝らめき館	輝らめき館到着	

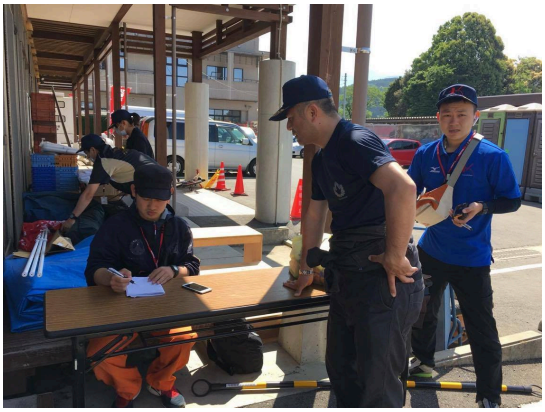


写真 5　屋外にて急遽統括本部設置

写真 6　学生も統括本部に参加

写真 7　島崎所長、田中所員が学生の激励に統括本部訪問

写真 8　西原村ボランティアセンター前にて、島崎所長、田中所員、二宮職員、植田助手

VI.　まとめ

今回の熊本地震の特徴は、余震の発生回数が多いことであり、実際に現地に到着した 29 日に、大分県中部で震度 5 強の余震が発生した。長期間にわたる当研究所の熊本地震災害ボランティアは、参加者全員が事故無く無事にすべてを終えた（写真 9）。倒壊家屋の瓦礫撤去作業では、危機管理として、活動前に余震が起きた時の行動を確認、さらに救助の視点から災害現状での安全管理を行い、効果的に実践できた。避難所の支援では、感染症のリスクを回避するため、消毒をしながら掃除を行った。そして、簡易ベッドの作成など被災者に寄り添い避難生活を援

助した。こどもの支援では日常に少しでも近づけるように、こども教育の視点からストレス緩和に役立てていた。さらに、インシデント・コマンド・システムを活用し、各活動隊における指揮命令系統を確立し、安全で確実な活動を行うことができた。また、当研究所の防災リーダー教育や過去の支援活動の経験から、被災者のニーズに応える活動もできた。DMATなどの医学的支援が考えられがちであるが、医師以外の医療従事者でも被災者の立場にたった医療支援が可能であると感じた。今後は指揮命令ができる人材の養成、とくにロジスティクス能力の普及が課題である。

今回の熊本地震災害ボランティアの経験を活かし、更なる災害に強い防災拠点大学としての整備を進める。

そして、本来ボランティア精神というものは「人を助ける強さ・やさしさ」を持って活動するものである。今後この精神を持った学生を養成するために、新たな研究領域を開拓し、集中的に防災研究を深め、学問分野を確立すべく研究を推進する機関となることを目指す。

写真 9　参加者全員事故なく無事に活動終了

Ⅱ．平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

2，国士舘大学災害ボランティア先遣隊の支援活動について

体育学部　スポーツ医科学科　教務助手
坂梨　秀地

Ⅰ．　はじめに

この度発災した「平成 28 年（2016）熊本地震」に伴い、現地からの要望もあり、熊本県上益城郡御船町にある御船小学校に開設された避難所へ、支援物資を国士舘大学先遣隊として届けた。発災 2 日後の平成 28 年 4 月 16 日（土）午後 1 時 04 分に大学を出発し、当研究所所有のトラックで支援物資を搬送した。本報告は、先遣隊の災害支援活動をまとめたものである。

活動にあたり、発災直後ということで余震の心配、道路状況等のリスクが伴う状況であったが、支援物資の搬送と視察のみということで、安全を第一条件として、こどもスポーツ教育学科の永吉先生と二人で活動を行った。

Ⅱ．　活動概要

- 支援物資の搬送
- 視察

支援物資一覧表		
No	資機材	箱数
1	五目ご飯 50 個入り	40
2	ペットボトル(水) 24 本入り	27
3	サンマレトルト 50 個	2
4	鶏肉野菜煮 50 個	3
5	富士ミネラル 24 本入り	38
6	森の水だより 2ℓ　6 本入り	20
7	発電機	2
8	α米　50 入り	3

4 月 16 日（土）の午前中に物資の積み込みを行い、13 時 04 分に大学を出発した。概ね 19 時間をかけて移動し、翌朝 7 時 45 分に御船小学校避難所に到着した。

写真　1　御船小学校避難所

本活動のクロノロジー

活動日	時刻	内容
2016/4/16	**13:04**	**熊本に向け、学校出発**
	14:14	横浜町田 IC 通過
	14:58	足柄 SA に到着・休憩
	15:35	足柄 SA にて給油・出発
	17:53	刈谷 SA に到着・休憩
	18:15	刈谷 SA にて給油・出発
	20:48	三木 SA に到着・休憩
	21:20	三木 SA にて給油・出発
	23:19	福山 SA に到着・休憩
	23:45	福山 SA にて給油・出発
2016/4/17	1:50	下松 SA に到着・到着
	2:07	下松 SA にて給油・出発
	4:28	鞍手 P に到着・休憩
	4:40	鞍手 P を出発
	4:58	古賀 P にて給油・出発
	6:22	**植木 IC にて高速降りる**
	7:45	**御船小学校（避難所）到着。**
	8:00	**物資搬入**

	8:45	搬入終了・撤収
	9:12	避難所周辺の家を視察（445 線沿い）
		家が崩れ、作業している家を訪ねブルーシート・α米配布
	9:20	熊本市社協に向け出発
	9:53	熊本市社協に到着するも、開設しておらず、人もいなかったため、東京に向け出発
		熊本市内から北に向けて移動する人が多く、どのルートも渋滞。この渋滞はしばらく続くとのこと。（坂梨父情報）
	13:25	**植木 IC、通過**
	15:10	めかり P 到着・休憩
	15:50	めかり P 出発
	16:44	美東 SA にて給油
	18:00	宮島 SA 到着・休憩
	18:17	宮島 SA 出発
	19:20	福山 SA にて給油
	20:41	龍野西 SA に到着・休憩
	20:55	龍野西 SA を出発
	22:34	草津 SA 到着・休憩
	23:00	草津にて給油・出発
2016/4/18	0:57	新城 SA に到着・休憩
	1:10	新城 SA を出発
	2:34	駿河湾沼津 SA 到着・休憩
	2:48	駿河湾沼津 SA を出発
	4:05	**学校着・解散**

Ⅲ.　御船小学校避難所での活導

到着後、水、食料等の支援物資を搬入した。避難所では、支援物資が配給される時間が決まっており、その時は避難者の方が列を作っている状況であった。

写真 2　支援物資を搬入する様子

写真 3　御船小学校避難所内の様子

御船小学校避難所は、被災された方々で満杯になり、車中で寝泊りをしている人や、自宅は大丈夫だが余震が怖くて避難している方も多数いた。避難所を運営しているのは外部のボランティア団体、それに御船町役場の方々で、御船小学校の教職員の方も手伝っている状況であった。

Ⅳ.　ブルーシートの配布

避難所に物資を搬入後、倒壊している地区に赴き視察を行った。そこで家の片付け、修復作業をしている方々に、ブルーシートを配布した。屋根瓦が崩れていると雨が降った際に、雨漏りが起こるため、それを防ぐためのブルーシートを屋根に覆う。他にも災害時にはブルーシートは多目的に活用され、貴重な物資となる。

写真 4　倒壊している家の様子

写真 5　ブルーシートを配布したご家族

Ⅴ.　まとめ

今回の活動は支援物資の搬送と視察のみであったが、今後も継続的な支援活動、ボランティア派遣が必要になるのは確かであった。メディアでは伝わらない被災された方々の本当の気持ちを少しでも感じることができ、今後の支援活動に活かすことができる。

陸路での移動だったため、道路状況や被災状況等の情報を共有出来る後方支援隊との連携が重要であると感じた。発災直後ということもあり、被害が大きかった熊本市、益城町、御船町周辺では、道路に亀裂や段差があり通行が困難な状況で、ライフラインも整っておらず、救急車やDMAT隊が行き来をしており急性期での活動であった。物資が届かない場所もあり、支援活動を行う際には、安全の確保、被災状況の把握、ニーズ把握が発災直後では求められると感じた。

写真 6　支援物資が届かなくて高校生がSOS サインを出した写真

Ⅱ．平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

3，西原村地区における瓦礫撤去作業について

防災・救急救助総合研究所 所員
髙橋　宏幸

Ⅰ．５月１日（日）：快晴 西原村での活動初日

災害ボランティアセンターからの割り振りにより、西原村で活動することになり、既に調査のため現地にはいっていた当研究所の嘱託研究員である宮崎猛志氏とともにボランティアにあたった。宮崎氏と合流早々に西原村で活動する３日間の打ち合わせを行った。

５月３日に大勢のボランティアを現地入りさせる話があり、それまでに必要最低限の作業を終えておきたいとのことであった。

その作業というのが、被害が大きい家の瓦をおとすことであった。すでに部分的に瓦は落ちてしまい、雨が降ることにより家内にある持ち出せない家財が浸水してしまう恐れがあることから、周辺住民の方々がボランティアテント（写真２）に手を貸してほしいという依頼を多く寄せていたところであった。また次に大きな地震が発生した場合、瓦の重さに家の柱が耐えきれず被害が大きくなる可能性も危惧されており、その作業は迅速性を求められていた。

写真１　西原村

写真２　ボランティアテント内

初日は瓦をおとす下調べを行う作業と倒壊した納屋を整理し、瓦礫を除去する作業を担当した。

倒壊した納屋や、建物を隔てるブロック塀が無惨にも倒れ果てており、トラック二台を巡回させ瓦礫集積所へそれらを移動させるという活動であった。木片や家財を持ち上げるたびに、埃や土煙が舞い上がり、所々にちらばるガラス片や瓦の破片がその被害の甚大さを印象づけるものであった（写真３）。

写真３　作業風景

この家のご主人が作業の合間に地震直後の話を語ってくれた。立っていられないほどの揺れを感じたこと。これで（人生が）おしまいだと悟ったこと。庭でつぶれた納屋をみて絶望したこと。その時間で時をとめた柱時計を携帯の写真におさめており、毎日思い出すこと。それはどれも我々の想像を超える話であり、皆言葉をのんでその話を伺った。我々は再び気持ちを引き締め作業に当たった。

日差しが強く、本来は影を作るはずの納屋がないことから皆汗だくになりながらその活動を終えた。

その日の作業を終え、改めてボランティアの必要な持ち物として土嚢袋や工事用の工具（ドライバー、チェーンソーまではいかないまでものこぎり等）があると作業効率はあがるだろうと感じた。またこの作業をしている学生ボランティアのグローブもその日一日の作業でみな穴があいてしまい、その重労働さを物語っていたが、その予備を個人の持ち物にするという考えやいざという時の為に組織としてもいくつか持っておくべきであったと考えた。

Ⅱ．５月２日（月）：快晴　西原村での活動二日目

初日に瓦を落とす優先順番を決めていたため、２日目は早速屋根にあがり瓦を下におとす作業を行った。

翌日、大雨の予報があり急ピッチで作業が進められた。１件目は１階が半壊しているお宅だった。のぼる足場が悪かったが、屋根部分はしっかりしており、日本家屋の強さを感じた。瓦を外す作業と、除去する作業に別れ効率よく進められた（写真４）。

写真４　作業風景

写真５　作業風景

２件目は、骨組みはしっかりしているお宅で１件目のようなショベルカーがあるわけではなかったため、地面におとし、それを山積みにするような作業であった。前日の教訓をいかし手押し一輪車を準備し、３時間ほどを要し１、２階の屋根瓦をすべて除去した（写真５）。

ここで本学の学生の力を垣間見ることとなった。効率よく、かつ力強い彼らの作業にご主人もおどろいており、現地のボランティアセンターとしても予定していた時間よりも早く作業を終えることができた。

一日の作業時間は学生の体力面を考慮し活動時間をきめていた。その日の作業時間は残り１時間をきっていたが、前述した通り翌日の天候が懸念されていたため３件目の瓦おとし作業を強行することとなった。すでに15時を経過しようとする時間だったが、学生もやれるだけのことをしていきたいという気持ちがあり、休憩をとりながらも部分的に瓦を除去する作業を引き受けた。

このお宅は、１階部分が他のお宅よりも高く、２階の瓦を外し落とす作業であったため、この日一番の高所での作業となった。しかし、学生も３件目ということもありここでも作業は効率よくボランティアニーズに対応することが出来た（写真６）。

写真６　作業風景

Ⅲ．５月３日（火）：雨 西原村での活動三日目

この日は、瓦を外したお宅の屋根にブルーシートを張る作業を計画していたが、天候があいにくの雨であった。

我々の宿舎周辺では朝食時にまだ雨は降っていなかったため、この日の現地入りを１時間早め９時に古閑地区に入れるよう準備を行っていたが、区長の判断でこの日のボランティア活動は中止となった。前日のボランティアセンターでの会議でも雨天時は西原村の屋外でのボランティア活動は原則禁止の指示がでており、結果として西原村古閑地区自体住民含め立ち入りが禁止されることとなった。

そこで区長に相談し許可をいただき、学生共々2 日間活動した場所を巡回させていただき、最後に改めてその震災の爪あとを目に焼き付けることとなった。

写真７　活動風景

今回の活動を通じ、震災ボランティア活動のなかで時間とともにかわるニーズの複雑さや、その活動の意味・尊さを体感する機会をいただいた。

高所での作業のこわさ、個人の装備の重要性、現地の方とかわすコミュニケーションの難しさ等いずれも教科書で読めばわかることではなく１つ１つが実体験を通じて得る教訓であると感じた。ボランティアに当たったスタッフは皆真摯に活動に従事していた。

私自身が今回のボランティアから学んだことは、このような活動を通じて震災と向き合うこと、さらに震災を乗り越える力を養うことが重要であると感じたことである。その経験はきっと一人一人の防災に対する考えの礎となり、次に被災者となったときに大きく役に立つ力であることを信じてやまない。

最後に今回の震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りし、被災に合われた地域の皆様の一刻も早い復興を祈念いたします。

Ⅱ. 平成 28 年(2016 年)熊本地震への被災地支援活動

4, 熊本県庁医療救護班災害対策本部視察および益城町ボランティアセンター支援

防災・救急救助総合研究所 職員
月ヶ瀬 恭子
防災・救急救助総合研究所 職員
岩田　彩奈

Ⅰ．　はじめに

平成 28 年熊本地震において益城町は約 3 万人の住民のうち死者 21 人、避難者数はピーク時には 1 万人を超え（5 月 29 日現在でも約 2700 人は避難生活を行っている）甚大な被害を受けた。福島県救護班として熊本県へ災害派遣されていた福島県立医大の中島成隆医師より当研究所に依頼があり、益城町において 4 月 30 日から 5 月 3 日まで災害支援活動を行った。また、中島医師の好意により熊本県庁に設置されている医療救護班災害対策本部への視察も行った。（写真 1、2）

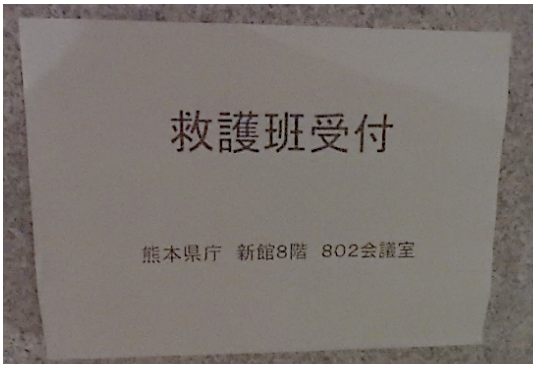


写真 1　医療救護班受付

写真 2　熊本県庁前にて

Ⅱ．　益城町の被害状況（5 月 29 日現在）

人的被害　死者　21 名
　　重傷者　6 名
　　軽傷者　3 名
住家被害　全壊　3,966 棟
　　半壊　3,109 棟
　一部破損　8,216 棟

避難所数及び避難者数（5 月 29 日現在）

避難所数　14 箇所
避難者数　2,747 名

写真 3　倒壊した家屋

写真 4　倒壊した家屋

Ⅲ．　活動内容

益城町では 4 月 30 日から 5 月 3 日までの 4 日間、各日引率者含め 10 名が活動を行った。

益城町は震度 7 を 2 回観測した地域であり、建造物には大きな被害が見受けられた。そのため、避難者数も多く避難所となった小学校の体育館や総合体育館は過密状態であった。このような状況では様々な問題が発生する。過密状態にある避難所は、プライベートな空間もなく、

常にストレスにさらされている。日中に家を片付けに行き、夜はまた避難所で寝るという生活を送る被災者の方が多かった。身体を十分に休めることが出来ないまま片付けを行っていた。また、過密状態の避難所では感染症などのリスクも高まる。以上のことを考慮して、医師、看護師、熊本県、益城町の職員で構成された、益城町避難所対策チームが新規避難所の開設と“リフレッシュ避難”という取組みを行っていた。私たちはそのサポートに入り活動を行った。

1）新規避難所の開設

益城町には益城町公民館、益城町公民館飯野分館、益城町公民館津森分館、益城町公民館福田分館と４つの公民館がある。すでに避難所となっている公民館もあったが、過密する指定避難所から避難者に移動してもらうための準備を行った。開設支援活動を行った避難所および活動内容については、益城町公民館飯野分館では、ダンボールベッド作成、設置を行い、益城町公民館福田分館ではパーテーション設置、ダンボールベッド作成、設置を、益城町公民館津森分館へは支援物資搬入を行った。益城町男女共同参画センター輝らめき館についてはパーテーション設置、ダンボールベッド作成を行ったが、施設内の電気工事実施に伴い、設置したパーテーションおよびダンボールベッドの解体を行った。

支援活動の準備は、ダンボールベッドの作成・設置、部屋の片付け、庭の草取り、清掃であった。ダンボールベッドの作成は初めての学生がほとんどであったが、作業効率を考え、工程ごとに担当を決め効率よく丁寧に行っていた。

＜ダンボールベッドの作成方法＞

1.小ダンボール 24 個（もしくは 12 個）組立てる

2.組立て済みダンボール内にダンボールを差込む

3.上部を仮止めし、囲いに 4 個（または 2 個）ダンボールをはめ込む

4.はめ込んだものを 6 個セットでベッドにする

5.天板ダンボールを乗せ、頭部側にパーテーションをして完成

6. パーテーションを設置しプライベート空間を作る

２）“リフレッシュ避難”業務の補助

“リフレッシュ避難”は、過密状態の避難所で生活し、余震のストレスを抱える避難者の方に遠方へ１泊２日程度で避難して頂き、心と体を休めてもらおうという益城町役場　避難所対策チームが中心となり企画した支援のひとつである。過密状態の避難所では、感染症のリスクが高くなることや、活動量が減り、歩く能力の低下がみられ、転倒の危険が高くなることが考えられる。“リフレッシュ避難”先は、熊本県玉名市・山鹿市の福祉避難所、熊本県天草市下田温泉、宇城市豊野青少年自然の家である。この企画は避難所を回る医療チームや県の職員が、避難している方にアナウンスをし、希望する方には申込み用紙（写真４）に記入をして頂く。

ここでの学生の活動は、申込み用紙を基に参加人数、日程、場所、部屋の希望、バス利用の有無、現在の避難所等を避難者の方に電話で確認する作業と PC への入力、本部のクロノロ記入を行った。

避難している方に電話で希望を取っていると、「是非参加したいけれど、家族の中に障害を持っている者がいて車椅子を使用しているため、介助がないと参加できない。」、「介助が必要なので行くと迷惑をかけてしまうかもしれない。」と涙を流してお話される方もいました。相手の顔が見えない電話でのやり取りや対応の難しさを感じた学生が多かったが、避難者の気持ちや困っていること、希望することを聞き出すことができていた。

避所対策チーム本部のクロノロ記入は、本部の医師にかかってきた電話相手や内容を簡潔にまとめ、ホワイトボードシートに記入した。また医療班の到着や活動場所もクロノロに記入した。反省点としては、学生の個人携帯を使用していたため、その日の活動が終わった後に折り返し電話がかかってくることがあった。留守電に避難所対策チームの固定帯電話の電話番号を入れておくべきであった。

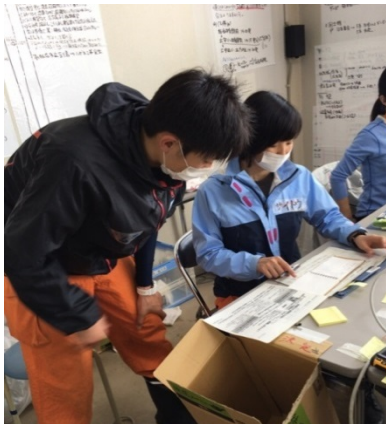


写真 5 申込み用紙を基に確認作業を行う学生

リフレッシュ避難申込み書　提出期限：5月2日（月）　午前9時○○分まで　速報

希望するリフレッシュ避難先に○を付けてください。
A玉名市・山鹿市 福祉避難所（　）・B天草市 下田温泉（　）・C宇城市 豊野青少年自然の家（　）

以下の欄に宿泊予定の家族のお名前等を記入ください。

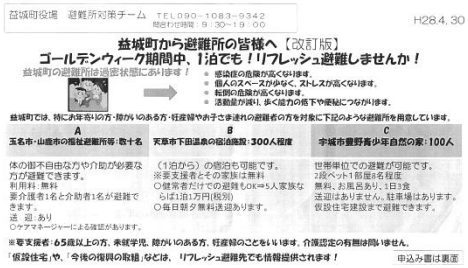
※（　）内又は各選択肢のいずれかに○を付けてください。
※ご家族が4人以上の方は裏面に必要事項をご記入ください。

避難者氏名（　）	（　）歳	（男・女）	高齢者（介護度　）	障がい者	妊産婦	乳幼児	（車椅子）	有	無
避難者氏名（　）	（　）歳	（男・女）	高齢者（介護度　）	障がい者	妊産婦	乳幼児	（車椅子）	有	無
避難者氏名（　）	（　）歳	（男・女）	高齢者（介護度　）	障がい者	妊産婦	乳幼児	（車椅子）	有	無
避難者氏名（　）	（　）歳	（男・女）	高齢者（介護度　）	障がい者	妊産婦	乳幼児	（車椅子）	有	無
避難者氏名（　）	（　）歳	（男・女）	高齢者（介護度　）	障がい者	妊産婦	乳幼児	（車椅子）	有	無
避難者氏名（　）	（　）歳	（男・女）	高齢者（介護度　）	障がい者	妊産婦	乳幼児	（車椅子）	有	無
避難者住所　（　）				出発希望日（　月　日） 希望避難期間（　泊　日） ※長期希望の場合（　1週間、2週間、1カ月 その他（　）					
避難者連絡先　（携帯番号									

○申込み方法 各避難所の事務室かウンターに設置している申込み箱に提出してください。

【お問合わせ先】益城町役場 避難所対策チーム TEL090－1083－9342　問合わせ時間：9:30～19:00

写真 6　リフレッシュ避難申込書



益城町役場　避難所対策チーム　TEL090－1083－9342
問合わせ時間：9：30～19：00

H28.4.30

益城町から避難所の皆様へ【改訂版】
ゴールデンウィーク期間中、1泊でも！リフレッシュ避難しませんか！

益城町の避難所は過密状態にあります！

- 感染症の危険が高くなります。
- 個人のスペースがなく、ストレスが高くなります。
- 転倒の危険が高くなります。
- 活動量が減り、歩く能力の低下や便秘につながります。

益城町では、特にお年寄りの方・障がいのある方・妊産婦やお子さま連れの避難者の方を対象に下記のような避難所を用意しています。

A	B	C
玉名市・山鹿市の福祉避難所等：数十名	天草市下田温泉の宿泊施設：300人程度	宇城市豊野青少年自然の家：100人
体の御不自由な方や介助が必要な方が避難できます。 利用料：無料 要介護者1名と介助者1名が避難できます。 送　迎：あり ○ケアマネージャーによる確認があります。	（1泊から）の宿泊も可能です。 ※要支援者とその家族は無料 ○健常者だけでの避難もOK⇒5人家族ならば1泊1万円(税別) ○毎日朝夕無料送迎あります。	世帯単位での避難が可能です。 2段ベット1部屋8名程度 無料、お風呂あり、1日3食 送迎はありません。駐車場はあります。 仮設住宅建設まで避難できます。

※要支援者・65歳以上の方、未就学児、障がいのある方、妊産婦のことをいいます。介護認定の有無は問いません。

「仮設住宅」や、「今後の復興の取組」などは、リフレッシュ避難先でも情報提供されます！

申込み書は裏面

写真 7　リフレッシュ避難パンフレット

Ⅳ．まとめ

今回の地震は東日本大震災に比べ、被害が限局していたことや津波の被害が無かったため比較的早くボランティアセンターの開設、受け入れが始まったと思われる。しかし、現地に入ってから度重なる余震を体感した。私が主に活動を行った益城町公民館は内部の壁が崩壊しており、照明がぶら下がっている状態のところもあった。そのため常にヘルメットを着用し、避難経路も確認してから活動を行うよう徹底した。

益城町のボランティアセンターが開設された直後で、様々な団体が同じ場所で活動を行っていた為、スムーズに進まずもどかしさを感じた学生もいたが、被災者の方のニーズに応えた活動が出来たと思う。

今回益城町の中でも活動場所が数か所に分かれることもあり、学生が中心となって活動することが数多くあった。安全管理や国士舘大学ボランティア本部との連絡体制は確立されていたが、他の団体との連絡体制には課題が残った。避難所対策チームにも様々な組織の方が出入りし、担当となった各避難所で活動していたが、それぞれの団体間での連絡が取れなかったために、作業効率が落ちたところも見受けられた。

今回の地震だけに限らず、災害時の連絡体制は課題になると考えられる。錯綜する情報をどのように伝えるかが問題である。

東京で災害が起こった際には、今回の経験を活かし、学生と共に被災者に寄り添った活動を行えるよう、反省や課題をみんなで考えていきたい。

Ⅱ. 平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

5, 南阿蘇支援ボランティア
「竹田ベースキャンプ」運営協力

防災・救急救助総合研究所　所員
永吉　英記

Ⅰ．竹田ベースキャンプ概要

大分県竹田市は、竹田市社会福祉協議会（以下：竹田市社協）を中心に組織された「竹田ベースキャンプ」において、他県ながら隣接し、甚大な被災を受けた熊本県阿蘇地域の支援を行うこととなった。特に被害の著しい南阿蘇への進入ルートは、道路の被害状況と地理的な関係からも竹田市意外に主要な支援ルートがないため、5 月連休中に見込まれる多くのボランティアの受け入れに対応する必要もあった。

竹田市及び竹田市社協は、過去の水害により、災害ボランティアの受入実績があることや、東日本大震災においても竹田市社協職員は宮城県の支援を行っているなどから、支援ボランティアを受け入れるための専門的知識と実際に受入るための運営を経験している職員がいることも竹田ベースキャンプ開設（表 1）の要因となっている。

国士舘大学防災・救急救助総合研究所（以下：当研究所）は、東日本大震災、広島での土砂災害、伊豆大島土砂災害、常総市の水害での支援活動に関わったことから、災害ボランティア同士が連絡を取り合うフェイスブックやツイッターで、災害に関わる多くの情報を他の支援団体と共有していた。竹田ベースキャンプの情報も、このフェイスブックやツイッターで公開され、ベースキャンプを運営できるスーパーバイザーの要請があり、支援することとなった。

Ⅱ．活動報告

4 月 28 日（木）　第 1 回竹田ベースキャンプ運営員会が竹田市総合社会福祉センターで開催され、防災研としてリーダーの山崎源太（国士舘大学ＯＢ）が出席した。この会議では、ベースキャンプの組織体制、ベースキャンプ地となる旧荻支所庁舎での受入レイアウト、支援内容、運営方法などが話し合われた。

表 1　竹田ベースキャンプ運営委員会名

第1回南阿蘇支援ボランティア　竹田ベースキャンプ運営委員会出席者名簿

	団体名	役職	氏名
1	総務省選挙部政治資金課支出情報開示室	室長	濱田厚史
2	全国社会福祉協議会　地域福祉部	副部長	園崎秀治
3	大分県生活環境部県民生活・男女共同参画課	室長	石垣和之
4	大分県豊肥振興局地域振興部	部長	今仁
5	大分県社会福祉協議会地域福祉課	課長	藤田
6	さわやか福祉財団		
7	竹田商工会議所	専務理事	河野通友
8	九州アルプス商工会	副会長	村中武雄
9	竹田市観光ツーリズム協会		
10	竹田町商店街振興組合	理事長	都築員守
11	荻地域社会福祉協議会	会長	佐藤一夫
12	まちづくりたけた株式会社	総括マネージャー	子安
13	竹田市経済活性化促進協議会	次長	久保　高木
14	竹田市暮らしのサポートセンター連絡協議会	代表	小野朝男
15	国士舘大学	リーダー	山崎源太
16	嘉麻市社会福祉協議会		

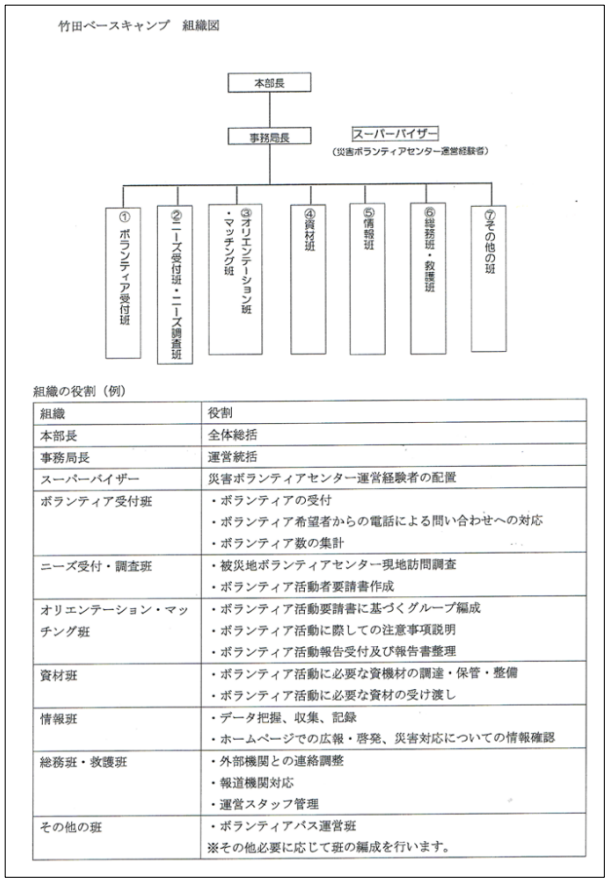
竹田市災害ボランティアネットワーク協議会

17	竹田市民生委員児童委員協議会	会長	添田　紀夫
18	竹田市防災士会	会長	添田　紀夫
19	大分県建設業協会竹田支部	事務局長	齋藤　留美子
20	大分県LPガス協会竹田地区LPガス協議会	会長	小坂
21	竹田市地区社協連絡協議会	会長	倉野　脩生
22	竹田市ボランティア連絡協議会	会長	吉弘　央
23	竹田市アマチュア無線赤十字奉仕団		今村　善次
24	竹田市赤十字奉仕団	委員長	佐藤　美智子
25	社会医療法人社団　大久保病院	理事長	大久保健作
27	竹田市総務課		
28	竹田市社会福祉課		
29	竹田市荻支所地域振興課		
30	竹田市社会福祉協議会		

4 月 30 日（土）　第 2 回竹田ベースキャンプ運営員会が開催され、防災研リーダーの山崎源太（国士舘大学ＯＢ）が出席し、役割分担等を確認した。当研究所の役割は、スーパーバイザーとしての協力と、総務班・救護班として数名を配置し、外部機関との連絡調整、報道機関対応、運営スタッフ管理、また、災害ボランティア管理ソフト「支援Ｐ」（サイボウズ社のクラウドサービス『kintone』と連携したお問合せフォー

ム）による受付、名簿管理、メール配信、その他ボランティア受入に関わる全ての資料作成とファイル管理を行う役割であった（表 2)。「支援Ｐ」とは、東日本大震災時、ボランティアとして参加したサイボウズ株式会社の職員が、災害ボランティアセンター運営に必要な管理ソフトを独自作成し、これまで様々な災害ボランティアセンターで活用され、また、使いやすいように改良されてきたソフトである。

表 2 竹田ベースキャンプ組織図



組織の役割（例）

組織	役割
本部長	全体総括
事務局長	運営統括
スーパーバイザー	災害ボランティアセンター運営経験者の配置
ボランティア受付班	・ボランティアの受付 ・ボランティア希望者からの電話による問い合わせへの対応 ・ボランティア数の集計
ニーズ受付・調査班	・被災地ボランティアセンター現地訪問調査 ・ボランティア活動者要請書作成
オリエンテーション・マッチング班	・ボランティア活動要請書に基づくグループ編成 ・ボランティア活動に際しての注意事項説明 ・ボランティア活動報告受付及び報告書整理
資材班	・ボランティア活動に必要な資機材の調達・保管・整備 ・ボランティア活動に必要な資材の受け渡し
情報班	・データ把握、収集、記録 ・ホームページでの広報・啓発、災害対応についての情報確認
総務班・救護班	・外部機関との連絡調整 ・報道機関対応 ・運営スタッフ管理
その他の班	・ボランティアバス運営班 ※その他必要に応じて班の編成を行います。

5 月 13 日（金）～5 月 19 日（木）

5 月 1 日（日）より竹田ベースキャンプでボランティアの受入が開始された。防災研は、開設の準備の協力を行い、改めてスーパーバイザーと総務・救護班を担当できる教員及び職員を 5 月 13 日に派遣した。派遣は永吉英記（体育学部准教授）と久保木翔大（防災研職員）の 2 名であった。また、継続的な運営協力体制を整えるため、多摩市社会福祉協議会職員 2 名が期間中同行し一緒に業務を行った（写真 1 図 1)。

具体的な業務内容（総務班）

・竹田ベースキャンプのオープン(朝 7 時)
・ＦＡＸによるボランティア受付対応及び問い合わせ対応
・災害ボランティア管理ソフト「支援Ｐ」によるメール、受付対応
・電話によるボランティア受付対応
・当日のボランティア参加者名簿の作成と配車手続き準備
・ボランティア送り出しの手伝い
・「災害派遣等従事車両証明書」「ボランティア活動証明書」発行関連業務
・ボランティア宿泊地の説明と紹介
・書類整理と書類作成
・外部機関との調整、報道関連対応
・運営スタッフの管理
・竹田ベースキャンプのクローズ（午後 18 時 30 分）

写真 1　活動風景

図３　５月１日～5 月 22 日までのボランティア参加予定者数と実績数

竹田ベースキャンプボランティア活動人数実績表

5月

日　時 曜　日	5月1日 日	5月2日 月	5月3日 火	5月4日 水	5月5日 木	5月6日 金	5月7日 土
事前申込	53	54	(82)	100	69	(68)	67
実ボラ人数	40	36	0	80	48	0	57
日　時 曜　日	5月8日 日	5月9日 月	5月10日 火	5月11日 水	5月12日 木	5月13日 金	5月14日 土
事前申込	72	35	49	66	68	64	78
実ボラ人数	55	27	36	46	51	49	59
日　時 曜　日	5月15日 日	5月16日 月	5月17日 火	5月18日 水	5月19日 木	5月20日 金	5月21日 土
事前申込	53	34	53	61	51	53	67
実ボラ人数	41						
日　時 曜　日	5月22日 日	5月23日 月	5月24日 火	5月25日 水	5月26日 木	5月27日 金	5月28日 土
事前申込	49						
実ボラ人数							
日　時 曜　日	5月29日 日	5月30日 月	5月31日 火			事前申込	1346
事前申込						実ボラ人数	625
実ボラ人数							

46.4%

大分県竹田ベースキャンプから熊本県南阿蘇村へ

熊本県南阿蘇村は、熊本市へとつながる道路の通行止めや橋の崩落などの影響により、物資の輸送やボランティアの往来は、隣接する大分県竹田市と通過するルートに限られていた。このような理由から、熊本県内のボランティアも南阿蘇の支援が出来ない状況であった。熊本県はゴールデンウイーク期間中のボランティアの急増を想定し、県外からのボランティア参加を制限していたが、南阿蘇村については、大分県竹田ベースキャンプに限り、県外からのボランティアを受け入れることとして作業人員を確保する対応を行った。このように、唯一の県外ボランティア受入場所となった竹田ベースには、多くの問い合わせや申込が寄せられた。竹田ベースキャンプは、通常の災害ボランティアセンターのように、被災地域の状況や作業場所を把握し、その上で必要なボランティアを派遣する仕組みはなく、必要なボランティアの数を集め、ボランティアセンターに送ることに限られたキャンプ地である。このような取り組みは前例が無く、災害ボランティアセンターの新たな仕組みづくりとして注目できる。

写真２　活動風景

図２　活動場所

しかし、今回の竹田ベースキャンプから、作業場所のマッチングが行われる南阿蘇村災害ボランティアセンターまでは、車で 60 分程度要し、細い山道を通ることもあり、二次的被害の可能性やボランティアの体力的問題、移送車両の確保の問題などの課題もあった。

5 月 1 日から 15 日までのボランティア活動人数と事前申込人数の実績は、雨天による作業中止日も除いて、申込者数が 828 人に対して、実際にボランティアに参加した人数は 625 人となった。事前申込については、当日の車両台数によって移送可能人数分だけを受け付けるよう対応した。

Ⅲ．課題（運営スタッフの不足）

今回の竹田ベースキャンプの活動に参加し、災害ボランティアセンターが抱える課題として、運営スタッフが不足するということがわかった。

竹田ベースキャンプだけでなく、熊本県南阿蘇村に開設された災害ボランティアセンターでも、運営できる力を持ったスタッフが不足したことによって、活動場所の確保、作業の振分、問い合わせ対応等の業務が追いつかず、結果的にボランティアが集まっていても作業に出かけられなかったり、ボランティアの受入を中止する事態が発生していた。また、活動場所の確保においては、実際に被災され、倒壊した家は数多く残っているものの、「罹災証明」の手続きを自治体で追いつかず、解体作業が進められないという状況も重なって、ボランティアの活動が出来ない状況であった。このような事態は、被災した自治体の職員がそういった手続きやボランティアセンターの運営を行うにことは困難であり、被災していない他地域の自治体職員や力量のある運営スタッフが継続的に関われる体制づくりが必要といえる。

竹田ベースキャンプにおいても、竹田市社会福祉協議会の職員が開設から 5 月中旬までの半月間、毎日運営を行ってきたが、通常の福祉関連業務と並行してベースキャンプの運営を行っていたため疲労したり、通常業務へのマイナス面もあったようである。ボランティアセンターの運営にこれまで携わり、大凡の内容を理解していた我々スタッフは、竹田市社会福祉協議会の職員等にしてみれば、竹田ベースキャンプの運営業務を一時的に預けられ、通常業務に集中できる時間が確保できたといえる。このようなことから、災害ボランティアセンター組織体制の課題として、運営できるスタッフが不足することと、被災していない地域から継続的な運営スタッフを確保することがわかった。

現在、災害ボランティアへの意識は高く、被災地では多くのボランティアが活動するようになった。このボランティアの力は復興を進めていく上では極めて重要な力になっている。また、この日本の災害ボランティアの力の大きさは海外からも注目されている。ボランティア参加者数が増えれば増えるほど、ボランティアセンター運営への

要求は高まり、スタッフに掛かる負担は増えるといえる。

写真３　竹田ベースキャンプにて

Ⅳ．今後の防災リーダー養成に向けて

防災研の取り組みとして、ボランティアリーダー養成をさらに充実させていく中で、ボランティアセンターを運営できる力量を備えた養成が極めて重要であると感じている。具体的には、①ボランティアセンターの１日の流れの理解　②「災害派遣等従事車両証明書」「ボランティア活動証明書」「罹災証明証」等の関連書類の手続き方法や記入方法の理解　③ボランティアからの問い合わせや受付の対応方法　④災害ボランティア管理ソフトの操作方法　等がリーダー養成のカリキュラムの中に取り入れる必要があるといえます。

Ⅴ．竹田ベースキャンプのスタッフとボランティアの皆様にエールと感謝を～

熊本県の甚大な被害に対して、隣接する大分県竹田市の皆様、竹田市社会福祉協議会の皆様が竹田市ベースキャンプを開設し、忙しい中、運営しつづけていることに対して、心からのエールと感謝の気持ちろ送りたいと思います。

「自分に出来ることを、少しでも被災者に届けたい」

ボランティアセンターで活動する人たち、そして、ボランティア活動をする人たちからはこの熱い気持ちが感じられます。この気持ちが災害ボランティアの原動力となっていることは間違いありません。仕事が忙しい中、現地に駆けつけるボランティアや就職浪人中の人、会社を辞めて無職の人もいました。「私たちは無職だから時間があるし・・」といいながら活動をしていきながら『チーム無職』という８人程度のグループを組んで、長い期間ボランティアを行っている人達もいました。

災害復興はこうした熱い気持ちを持った人達の力によって支えられていることを忘れてはならないと強く感じました。

竹田ベースキャンプのスタッフの皆様、ボランティアの皆様、がんばってください。

ありがとうございました。

Ⅱ. 平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

6, 西原村立山西小学校避難所の支援

防災・救急救助総合研究所　職員
久保木　翔大
体育学部スポーツ医科学科　OB
三島　大史

Ⅰ．西原村立山西小学校避難所運営本部の開設と需要（ニーズ）

4 月 29 日、西原村ボランティアセンターの設置と同時に、熊本県阿蘇郡西原村立山西小学校に避難所運営本部が開設された。山西小学校は震源に近く、半壊・全壊の住宅が多数を占めており、震災発生時の 4 月 14 日から大勢の周辺居住民が押し寄せていた。活動初日の避難者は 500 名ほどで、世帯ごとの間仕切りはほとんどなく、ダンボールベットもなく、授乳室も救護室の一角にパーテーションで仕切られただけの状態であった。

山西小学校避難所運営本部は、ボランティア受け入れ体制や、指揮命令系統が確立されていなかったため、需要（ニーズ）を本部で把握しきれていなかった。震災発生から 2 週間が経過し、電気やガスなどのライフラインは復旧しているところが多く見受けられたが、水道に関しては上水道が寸断されたままで給水車にて水の配給が必要であった。

Ⅱ．山西小学校での主な活動内容

具体的な活動内容は、昼食・夕食の炊き出し、支援物資の移動・整理・分配・数量確認、救護所の移動、トイレ掃除であった。また、ボランティアセンターの運営にも携わり、物品管理の配置図の作成も担当した。最終日には、被災者の方々へ必要物品の確認を目的に声掛けを行った。

写真１　避難所の様子

次に活動内容について詳細に説明する。

1）昼食・夕食の炊き出し支援

支援地の給食センターは、設備の被害は最小限であり、電気、LP ガスが使用できたため、他団体が炊き出しを行う際、本学ボランティアは食材の運搬や食料の仕込みなど、炊き出し支援を行った。水道が出ないため、給水車の水をバケツにて給食室まで運び、食材の調理、器具の洗浄等を行った。避難者の多数は高齢であり、被害が少ない熊本市街地への買い出しは困難な状況であったため、この炊き出しの意義は高く、避難者からの需要（ニーズ）に十分に応えることができた。また、カレーやたこ焼きなど手作りの料理は、インスタント等の非常食生活が続いていたこともあり、避難者の方々に大変喜ばれ、炊き出しを実施する側においても、材料費が低コストに抑えることができ効率のよい炊き出しとなった。

写真２　炊き出しの様子

写真３　炊き出しの様子

２）支援物資の管理運営

避難所に届けられた支援物資の数量は充分に確保できていた。しかし、どこにどの物資がどのくらい置いてあるのか、運営本部は把握しておらず、配給の際の振り分けや、どの物資が足りないのか確認できていない状態であった。円滑に物資の配給を実現するためには、物資の個数、保管場所、配給した人物歴などを図面や表などにして指示管理する必要がある。例を挙げると、今回、小児用オムツが大量に固まって保管されていたのだが、乳児用と高齢者用が混在していた。さらに、別の物資の場所に小児用オムツが発見されるなど管理の不手際が露骨に見え、このような状況で乳児用オムツの需要があった場合、物資はあるが探すことが出来ず、需要に応えられない可能性が出てくる。

写真４　支援物資の整理作業

そこで、保管場所や分類分けの提案を本学ボランティアで行い、物資の搬出作業、配置表示の作成をボランティアセンター運営者と共同して行った。物資の整理作業は５月２日で終了することができたが、小学校の再開を５月８日までに行うことが決定したため、避難所を半分程度の規模へ縮小すること、教室に避難をしている人を体育館に集めることが必要となった。それに伴い、１階と２階に分散してある物資を体育館２階ギャラリーに移動し、整理を行い、物品管理の表示を改正した。また、救護所は校舎の保健室を使用していたが、学校再開に向け体育館１階準備室に移動することが決定した。加えて、医薬品の移動・整理を行い、診察用にダンボールベットを１台作成した。

写真５　支援物資の運搬作業

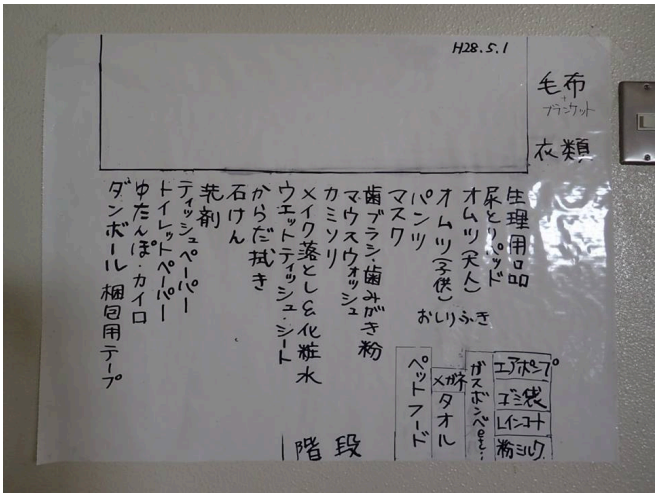


写真６　支援物資の配置表示図）

３）衛生環境

西小学校避難所の衛生環境の問題として、トイレが挙げられる。断水地域には仮設トイレが設置されるが、これは大体のものが汲み取り式であり、一回の大小便により不衛生なものになる。そのため、使用者の頻度にもよるが、一日最低５回は掃除を含めた清潔管理を実施したい。山西小学校のトイレも、糞尿が便器上に見受けられるトイレが多数見受けられた。集団が生活する場所、ましてや震災によるストレスで免疫力の低下した被災者が集まる避難所での感染症だけは決して発生させてはならないことであり、ノロウイルスやコレラなど感染症の集団流行（パンデミック Pandemic）の発生するリスクが急上昇する危険性がある。

また、清掃作業を実施する際にも、アルコール消毒液を使用した手洗いやうがいを入念に行うなど、感染予防を徹底して活動を行った。加えて、次亜塩素酸を使用した便器掃除も実施し、支援地の清潔管理に力を注いだ。

写真６　トイレの清掃作業

４）被災者への声掛け

運営本部より、避難所内のニーズの調査を依頼されたため、5 月 3 日、避難者への声掛けを実施した。遵守事項として、第一声は必要物品の確認から行うこと、上級生と下級生のペアで巡回することとした。避難者の声としては、「物資は十分であり、避難所の運営にも不満はない。」「世帯の男手が日中復興作業を行っているため、女性で家庭生活を守らなければならないことが不安。」「運営本部の方も被災されているので、休ませてあげてほしい」という声が上がった。

Ⅲ．支援活動を終えて、今後の活動指針

今後の本学の活動の検討課題としては、「どこまでの作業をボランティアとして行うべきか」を、再考すべきであると感じた。理由として、依頼されたことをすべて行ってしまうと、避難者がボランティアに依存し過ぎてしまうからである。そこで、どこまでの範囲で業務を行うのかをボランティア派遣計画中に検討する必要があり、実施者に引継ぎを行わなければならない。

また、避難所やボランティアセンターの運営に関わる場合は、後任者に引き継ぐことを念頭に活動しなければならないということを、現場の混乱状況を見て再認識した。その点において、支援物資の整理を行い、物資配置表示を作成したことは、後任者に業務を引き継ぐ際に非常に有用なものであったと言える。さらに、5 月 3 日に行った避難者とコミュニケーションをとることは、学生にとっても、彼らの今後の人生に影響を与えるものであることが分かった。

Ⅳ．まとめ

最後に、ボランティア活動を通しての考察を総合的にまとめる。今回の熊本地震では、甚大な被害が発生し、中でも山西小学校の周囲は被害が大きく、多くの方が避難をするなか、ボランティア運営本部は、被害が少ない地域にあり、かつボランティア運営経験がない方が多いということで大変混乱していた。そのなかで本学ボランティアは、亜急性期に現地入りし、教育機関としての実施可能な範囲を見極め活動方針の決定を行った。

また、ボランティアを行う者は、単に役に立ちたいという気持ちだけではなく、相手のことを「思いやること」が求められる。例えば、支援物資の整理の際、消費期限の近い食品や、新品ではないタオル等、使用に適さない物資が多く、安易な考えで送られてきた物資が多く見受けられたり、何の連絡もなく物資を持ってくる団体が多々あったりしたため、改めて「ボランティアとはどうあるべきか」を再考するきっかけとなった。

さらに、今回の活動は主にボランティアセンターの運営面に該当するものであった。というのも、災害亜急性期に現地入りをしたという事実、教育機関としての実施可能な範囲を見極め活動方針の決定を行ったからである。国士舘大学として、今後震災のボランティアで活動を行う際、この活動方針は揺るぎないものにする必要があり、さらには活動のなかにも学生に思考させるといった学習が必要であると考える。

国士舘大学ボランティアは、現地に赴き、「需要を探す・解決策を探す・実行できる・思いやれる」ことができる人材であり続けなければならない。そのため、今回の活動はこれからの活動指針の根幹になると考えている。現地でしか聞けない声、感じられない雰囲

気、考えられることがある。災害発生時、総合的観点から災害時の避難所運営やボランティアの効率的活動を行うことができる人間、「防災リーダー」を増やしてゆくことが急務であり、帰京したボランティア参加学生とともに、今回の震災の経験を伝える作業、防災・減災の普及に関わってゆく研究を実施継続していく所存である。

以上を、防災・救急救助総合研究所　久保木、国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 OB　三島からの活動報告とする。

Ⅱ．平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

7，国士舘大学災害ボランティアチームの拠点場所（玉名市）コーディネート

体育学部　スポーツ医科学科　教務助手

坂梨　秀地

Ⅰ．　はじめに

この度発災した「平成 28 年（2016）熊本地震」に伴い、国士舘大学では第２陣災害派遣として、学生 34 名、教職員９名、計 43 名で、４月 28～5 月 5 日にかけて災害支援ボランティア活動を行った。その際に拠点場所として私の地元である熊本県玉名市に拠点場所を設置した。

活動するにあたって、寝泊りする場所、食事、お風呂等の我々の生活も準備する必要があり、安全面、衛生面でも配慮が必要となる。活動場所の益城町、西原村付近では 43 名の拠点場所を確保するのは困難であったため、ライフライン、食事、温泉等が整っており、被害が少なかった私の地元の玉名市に拠点場所を置くことになった。

図１　拠点場所と活動場所を示す地図

Ⅱ．　拠点場所コーディネート

私の父（坂梨　誠一）に連絡し寝泊りする宿、食事・温泉の手配をしてもらった。自営でお弁当屋を営んでおり、また、玉名温泉地区組合の役員をしていることから、国士舘大学災害ボランティア活動の拠点場所の玉名地区コーディネートとしてご尽力を頂きました。

男性陣宿：玉名温泉地区公民館
　　河崎地区公民館
女性陣宿：坂梨夫妻　宅
温　　泉：玉の湯
食　　事：味福（お弁当屋）

玉名温泉地区全体にサポートして頂き、温泉の無料提供、食料の差し入れ、雨天時の食事場所、駐車場、宿の提供をして頂きました。

写真１　拠点場所での食事風景

写真２　夜ご飯の写真

写真 3　温泉の「玉の湯」

写真 4　男性陣宿の玉名温泉区公民館

写真 5　男性陣宿の河崎公民館

写真 6　雨天時の食事の様子

Ⅲ.　まとめ

国士舘大学だけではなく、支援活動に来ている人たちが玉名市を拠点にしている人は多かった。

玉名市の方とお話しをした際に、被災の大きかった益城町や西原村に行って支援をしたい気持ちはあるが、自分自身も被災者でなかなか行けない。ボランティアする人を受け入れサポートすることで、少しでも熊本のためになると思い協力しているとお聞きしました。我々はそういった人たちの思いを背負って、活動する必要があると感じた。いろんな形のボランティアがあり、復興のためにかける地元の思いを感じ活動することができた。また、たくさんの人がサポート、支援して下さる方がいて初めて活動ができていると改めて実感することができた。

写真 7　玉名地区コーディネートの坂梨夫妻との集合写真

Ⅲ. ボランティア参加学生レポート

1.被災地での学生ボランティア活動報告

国士館大学大学院救急システム研究科　修士課程 1 年
井上　拓訓
国士舘大学体育学部スポーツ医科学科　学生 4 年
星野　元気

Ⅰ．はじめに

今回の熊本地震にあたって、国士舘大学防災・救急救助総合研究所は人的支援としてボランティアを希望する学生を被災地である熊本市・西原村・益城町に派遣した。期間は 4 月 28 日から 5 月 5 日の 8 日間で行った。参加した学生は体育学部のみならず様々な学科の学生で構成され、参加者は国士舘大学学生、体育学部スポーツ医科学科の OB・OG、教職員合わせ 43 名であった。(表１） 本報告書では学生ボランティアの活動報告を行う。

表１：熊本市への派遣人数

体育学部スポーツ医科学科	28
体育学部スポーツ医科学科 OB・OG	2
体育学部こどもスポーツ教育学科	1
体育学部体育学科	1
法学部法律学科	2
法学部現在ビジネス法学科	1
大学院救急システム研究科	1
国士舘大学教職員	7
参加者数	43

Ⅱ．活動内容

１）瓦礫撤去班

瓦礫撤去班は災害支援活動などで豊富な経験を持つ IVUSA(国際ボランティア学生協会)と一緒に活動を行った。そのため、本来一般ボランティア立ち入り禁止区域での活動を行うことができた。活動内容は瓦礫の撤去、屋根の瓦外しが主だった。地震による倒壊の二次被害に屋根の瓦の重さが大きく関わってくるため、迅速な活動が求められた。

２）西原村ボランティアセンター班

西原村のボランティアセンターでのボランティア受付表(氏名、住所、電話番号、生年月日、資格、ボランティア保険加入有無など)を Excel ファイルへの打ち込み集計作業が主な活動内容であった。

３）子どもの健康管理班

西原中学校に設置されている子ども預り所での子ども達の健康管理が主な活動内容だった。活動場所の制限など様々な課題があった中で、それに対し臨機応変に対応することが求められた。また、子どもは周囲の他の子どもや大人から学ぶことが多いため、まずは子どもの親や周囲の大人を支援することが重要であると感じた。また、初めて災害を経験した子ども達を安全に遊ばせ、普段通りの生活ができるようにするようなボランティア側の対応も子ども達への安心の第一歩になるのではないかと考える。

４）西原中学校班

西原中学校のボランティアセンターで、依頼を受けて活動を行った。主な活動は物資の運搬、支援物資の整理、避難所の清掃、避難所の設営が主だった。ニーズの確認、避難している方への配慮、現れていないニーズの発見など様々なことに気を配りながらの活動が求められた。

５）山西小学校班

西原中学校のボランティアセンターで、依頼を受けて活動を行った。主な活動は

支援物資の整理、トイレの清掃等衛生管理、夕食の調理準備が主な活動だった。活動初日は山西小学校の本部でのボランティアニーズがまとまっておらず、ニーズを確認し、まとめることから始まった。避難所内には家が被災し避難している方が多く、家族ごとの仕切りが設置されていない中の作業であったため、言葉遣いや行動などその方々への配慮が必要であった。

６）益城町ボランティアセンター班

今回の熊本地震で、甚大な被害を受けた益城町での活動だった。ここは益城町ボランティアセンターの依頼を受けての活動になった。熊本県庁にある DMAT が主体の医療救護本部の見学も行うことができた。主な活動内容は避難所の設営、本部の補助などであった。

Ⅲ．生活状況

１）宿泊環境

活動拠点は熊本市から１時間程の玉名市に拠点を置いた。地元の方々にご協力を頂き、公民館・神社・ご協力頂けた方のお宅の３か所に場所を分け、持参した寝袋を使用し宿泊した。また、食事に関しては地元の方々のご協力で準備をして頂き、宿泊場所ではトイレ、電気、水道も完備され、近くの銭湯も使用することができた。地元の方々の多大なご協力により、衣食住が全て整った状態で、普段と変わらない生活水準を保つことができたため安全な活動を行うことができた。

２）タイムスケジュール

熊本では活動拠点で食事を摂った後、すぐに車で西原ボランティアセンターに移動し、各自の活動場所に向かうという流れで行った。活動場所が数か所に分かれていたために終了時間が活動場所によって異なったが、16:00 に西原村ボランティアセンターに集合するタイムスケジュールだった。

表２　１日のタイムスケジュールの例

5:45	起床
6:30	昼食
7:00	西原村ボランティアセンターへ出発
8:30	西原ボランティアセンターに到着
9:00	午前活動開始
12:00	昼食休憩
13:00	午後活動開始
16;00	活動を終了し西原ボランティアセンターへ集合
16:30	活動拠点へ出発
18:00	活動拠点に到着
18;30	夕食
19;30	お風呂
20:30	ミーティング
21:30	明日への準備
22:30	就寝

Ⅳ．　安全管理

１）連絡体制

活動時期がゴールデンウイークの時でまだ余震が続いていた時期であったため、学生の安全管理にはとても気を使う必要があった。活動場所での避難経路の確保、集合場所の確認は、各活動場所での確認を徹底した。各自の連絡体制は組織図を

作り情報の錯綜がないように努めた。また、後方支援として東京本部とIP無線を用いて通信し、地震情報・交通情報などの連絡を随時取れる体制をとっていた。

２）服装

被災地での活動時の服装は、活動場所で異なっていた。例を挙げれば、瓦礫を撤去するチームは釘などの踏み抜きを防ぐために安全靴を履き、防塵のためのマスク、瓦礫による怪我を防ぐために手袋の装着などを徹底した。全員に共通したことは必ずヘルメットを携行して自身の安全管理の徹底を図ったことである。

Ｖ．まとめ

今回のボランティア活動を通じ、ボランティアがバラバラに動くのではなく、ボランティア、ボランティアリーダー、ボランティアセンター、地元で支援にあたる市町村職員、統括本部が連携を密にすることで、情報の錯綜がなくなり活動がスムーズになった。その結果として被災地域でのより効率の良い活動が行えたのではないかと考える。ボランティアとして重要なことは、地域の方々と話し合い協力し合うことで支援策を模索し、被災者の自立への一歩を踏みだす手助けが重要であり、我々のようなボランティアが被災地に残すべきものは、内容や物ではなくシステムや協力関係である。必要なボランティアのニーズというものは急性期から亜急性期と時が経つにつれ変化していく中、その変化に対応できるようなシステム・協力関係の構築が復興への道筋につながるのではないか。

東日本大震災と同様に、復興の為にはまだまだ時間が要し、その時間経過と共にボランィア活動数も減少し、支援の先細りが考えられる。我々、ボランティアに必要なことは１度きりの支援ではなく、ボランティアのニーズがあるうちは継続的に支援することである。そのため今後も継続した支援活動をしていきたいと考える。

今後、関東圏でも大きな地震が発生すると予測されている。もし震災が起こった際には学生ボランティアが最前線でボランティア活動を引っ張り、学生ならではの元気を被災地域の方々に分け、若いならではの体力を発揮し活動をしていくことが必要である。そのためには、今回参加した学生の経験を伝えるだけでなく、そこから自分は何を感じ、何をやらなくてはいけないのか、何を学んでいかなければならないかを個々に考えることが重要である。

Ⅲ．ボランティア参加学生レポート

2.西原村ボランティアセンターにおける
こども達の支援について

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科　学生３年
沼田　浩人
国士舘大学体育学部スポーツ医科学科　学生３年
組澤　光一

Ⅰ．　はじめに

熊本県阿蘇郡西原村ボランティアセンター本部の 2 階で子どもの健康管理として、「親子カフェ」という活動をボランティアの方がしていたため、一緒に支援させていただいた。被災され避難所生活をしている子どもや家の片づけや修復などで親の目が届かない子どもを一時的に預かるという形である。毎日 1 歳～中学生まで約 15 人程度の子どもが訪れていた。室内で折り紙やお絵かき、積み木やボール遊びをして過ごす。午前・午後で分かれており、昼ご飯はそれぞれ食べに帰る。子どもだけでなく親御さんもボランティアの人と話に来るなど、親子ともに心のケアを行っている（写真 1）。

写真 1　活動風景

Ⅱ．　活動内容

4 日間の活動で実施したことは以下の通りである。

・子どもの心身の健康管理・衛生管理。
・一緒に遊んだり、話を聞いたりする。
・遊び場にあった物資の移動。
・遊び場スペースの拡張(机の配置や不要なものの撤去など)
・床がシートだったため撤去し清掃。

◎こどもの特徴

・被災し普段の環境が違うためパニック状態なのかとてもハイテンションである。
・わがままになる傾向がある。
・時々震災のことを思い出し寂しがる子がいる。
・両親から離れているため不安になる。
・遊びに夢中になりすぎると周りが見えなくなる。
・震災時のことを話してくる子どももいる。

Ⅲ．活動を通して

避難所生活では高齢者なども共同生活をしていることにより、子どもが騒ぐと不快な思いをされる方もいる。逆に子どもも遊ぶとこがなくふさぎ込んでしまう。よって、このような子どもが自由に遊べるスペース・おもちゃなどは震災において重要である。

預けにきてくださる保護者の方は「本当は一緒にいてやりたいけど、家の作業が進まないので」とおっしゃっていたので預かる側としては、責任感を持って活動した。あそびとしては、部屋の中で座って折り紙などする遊びと、ボールなど身体を動かす遊びを同時に行っているため危険であり、土足のため衛生面的にも悪い。部屋自体はそこまで狭くはなかったが、物資や机が邪魔でなかなかスペースが取れていない状況だった。ボランティアセンターの方にも相談をし、可能な事は子ども達も一緒に片づけや掃除を行った。いつもは楽しそうに遊んでいても、時に震災のことを思い出して不安に思っていたり、お母さんやお父さんに会いたくなるという場面があった。私達ができるのは、普段通りに接すること、話を聞いてあげることである。

課題として、学校が始まったら授業で 45 分間座っていられなくなってしまうことである。ボランティアの方と相談し、1 日中遊ぶのではなく、少しずつでも机に向かって勉強をする時間を作ったり、授業のような形式にしてみたりと計画をたてさせていただいた。1 日でも早く普段の生活に戻る支援をする気持ちがボランティアをするうえで大切である。

Ⅲ. ボランティア参加学生レポート

3.ボランティア活動を通して

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科	25 名
国士舘大学体育学部体育学科	1 名
国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科	1 名
国士舘大学法学部法律学科	2 名
国士舘大学法学部現在ビジネス法学科	1 名

1,　体育学部スポーツ医科学科　２年　金谷優兵

今回熊本地震のボランティアに参加して、初めて知ったことが沢山ありました。自分の中で被災地ではもっとニーズが飛び交っていて、やるべきことがたくさんあるからせかせかしているものだと思っていました。しかし、益城町に行ってみるとやらなくてはいけないことが多すぎてさばききれておらず、瓦礫もたくさんあり、家が倒壊や半壊したままの状態で、ボランティアが踏み入れられないところが多くありました。実際に自分が被災地に行った時はとてもモヤモヤする感じがしました。

また、瓦を土嚢袋に詰める時に人一人の出来る仕事量はとても微々たるものなのだと思い知らされました。国士舘大学では、いつも連携を大事にして行動しているので、指示を受けてからの行動がとてもスムーズにできていると思いました。でも、そこが良いところでもある一方で、悪いところでもあると思いました。指示がないときにどうするか？指示を受けていても、今何が被災者にとって必要かということを適切に判断することを鈍らせると思いました。活動場所に移動するとき、他のボランティアや、被災地の人達の車や通行止めが多かった為、渋滞があり自分たちの活動時間が短くなっていたのでルート検索の大切さがわかりました。このボランティア活動ではコミュニケーション能力がとても大切だと思いました。被災者の方と対話して分かることはとても多いと思いました。他愛ない話をしているだけで自ずと見えてくること（例えばニーズであったり）が分かってきました。

今回のボランティア活動で初めて震災で被害を受けた現場に自分が行くことができ、災害の怖さを痛感しました。自分はちょうど阪神淡路大震災が起きた次の年に産まれたので話や写真、映像では小学校の頃から当時の状況を聞かされていました。けれども、百聞は一見にしかずだと思いました。

この一週間のボランティア活動を通して、「対話、コミュニケーション能力」や「常に考えて行動」、「自己満足≠被災者の為のボランティア活動」、「ニーズのない所にも居続けるのもボランティア」。この４つを常に意識することが大切だと思いました。実際に行ってみて初めて分かる事も多く支援物資でも質や量が大切であったり、本部の少なさや、避難所の少なさ、支援し続ける事による自立が出来なくなる恐れがあることを学べて、とても刺激をもらえました。次に行く時には今思っていることを最大限活用してもっと質の高いボランティア活動をしたいと思いました。

2,　体育学部スポーツ医科学科　２年　藤田　莉乃

熊本のボランティアに参加させて頂いて、私はボランティアというそのもののイメージが変わりました。具体的な作業においてもそうですが、ボランティアは大きくテレビなどで報道され、復興に繋がっているように感じますが、そうではないことを感じさせられました。私は、３軒のお宅の瓦を落とす作業をさせて頂きました。しかしながら、自分たちがしたことは、その屋根の瓦がなくなっても、家が出来るまでの事を考えると、その家の人のスタートラインに立つことすら繋がっていないことに気づきました。ほんの一部の積み重ねが復興に繋がるということも強く感じたので、時の流れで忘れてしまったり、一度ボランティアに行って満足するということにならないようにしたいと思いました。また、私は、ボランティアに行ってただニーズに応えれば良い。与えられたことをこなせば良いと思っていました。しかし、国士舘でのミーティングで先生や先輩方の考え方を聞いて、ただニーズに応えるのではなく、自ら提案して動くことの大切さが分かりました。次の日から、自分に何が出来るのか考えるのを辞めず、動くことを辞めないということを意識しました。周りのボランティア団体とも協力して、コミュニケーションをとり、自分たちが動きやすい環境を作ることも大切だと実感しました。このボランティアを通して少し自分が成長できたと思います。また、行き帰り合わせて２日間もかかり熊本で無事にボランティア活動をさせて下さったり、自分の考えがまだ未熟と思えるような話し合いに参加させて頂けたこの環境にとても感謝しています。自分の想いや話、体験を周りの人に伝えようと思います。

3　体育学部スポーツ医科学科　２年　杉木　翔太

今回、災害ボランティア派遣チームの一員として、熊本の被災地に行かせて頂き、様々な活動をさせて頂きました。その中で、現地の方々とお話することができ、いろいろなことをお聞きすることが出来ました。私は、物資の数を数え、種類ごとに整理するという仕事を避難所でさせて頂きましたが、物資の整理を統括されている方の言葉が印象に残っています。その方は、たくさんの物資が届くことは本当にありがたいが、中には正直使えないもの、例えば汚れているタオルなどはあまり使えないから大量にあっても困ってしまうなど、ニーズに合っていない物資も届いてしまうと仰っていました。

私の地元は福岡で、地元の友達は震災直後に物資を集めて熊本に運んだりしていました。その行動は良いことだと思いますが、それがニーズに合ったものではないと逆に避難されている方や現場を統括している方に迷惑をかけてしまうと思いました。

実際に被災地に行って活動したり、物資を届けたりすることは、良いことだと思いますがしっかりと受け手側のニーズに対応しないとかえって負担をかけてしまうので、必ず情報収集して、自分がやるべきことをすることが必要です。今後も大規模な災害は必ず起きると思います。その時に、今回学んだこと、感じたことを活かして、行動できるようにしていきたいと思います。

4,　体育学部体育学科　３年　髙瀬　拓也

今回、この災害ボランティア活動を通して、改めて地震の恐ろしさを知った。

2016 年 4 月 14 日 21 時 26 分、恐らく大体の家庭は夕食を食べ終えていた頃であろう。1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災は 5 時 46 分に発生していて、朝食を作っていたりで火を使っている家庭が多かったのだと思う。それもあってか、火災が多く起こった。しかし、今回の熊本地震は時間帯が良かったのか火災の被害が少なかった様に思う。地震の発生するタイミングでこんなにも被害に差が出るのかと知った。

実際に私たちが活動してみて感じたことは、今回この国士舘のボランティアチームで行けてよかった。一般のボランティアでは入れない地区で活動することができて、尚且つ普段では行えない瓦礫撤去活動をすることが出来た。その撤去活動は予想以上に気を遣うことが多かった。瓦礫と行っても家主の人からしてみたら宝物なのです。その宝物を扱うに当たって、雑に扱ってはいけません。しかし、作業を行っていくうちに、疲労だったり、集中力が低くなってしまい、雑に扱ってしまう時がありました。そんな時家主さんを見てみると、自分の家が取り壊されていくのを悲しそうな顔で見つめていました。その人を見て、「この作業は私たちにしかできないんだ、だから今私たちが出来ることを精一杯やって帰ろう」と気持ちを入れ替え、私が出せる精一杯の力で作業を行いました。作業を終えてから家主さんから、「ありがとう」、「またお願いね」と言われ、心がスーッとしました。凄くありきたりの言葉かもしれませんが、私たちはこれで困っている人たちの役に立てたのかなと単純ですが嬉しくなった。

日本に住んでいる以上、地震の被害とはこれからも付き合っていかなければいけません。今後このような災害が起こった時は、今回のボランティアで学んだことを活かして今回よりも被災者の方の気持ちも考えて行動したいと思う。私の中でとても刺激的な活動になった。

5,　体育学部スポーツ医科学科　２年　雁林　拓馬

一週間熊本ボランティアに参加して強く感じたことは、瓦礫撤去をする前に言われた注意点です。瓦礫はゴミではなく、そこで暮らしていた人達の所有物であり、思い出が沢山あるものなので、大事に取り扱うこと、ということが活動中にさらに強く感じられた。瓦礫の中には原型を保っている物やまだ使えそうな物等が土の中から出てきて、そのたびに再確認させられた。

また、屋根の瓦を落とす際に、ただ何も言わず自分の崩れた家を少し離れた位置から見守っている人がいたことが印象深い。本当に瓦を落として壊してしまっていいのか、しかし瓦を落とさないと重さで屋根が崩れてしまう危険性があるので家の中へ入れないという、複雑な気持ちは何かとても大事なことのように思えた。その出来事によって自分自身の意識は「ボランティアをしてあげる」から「ボランティアをやらせてもらっている」へと変化した。

6,　体育学部スポーツ医科学科　２年　木村　慧

私は熊本のボランティア活動に参加して感じたことが大きく２つある。

１つ目は、安全確保だ。活動初日の午後に行った瓦礫撤去の活動で崩れた石垣の中にあるその家のテラスの柵を撤去し、雨で崩れないようにブルーシートをかけるという作業だった。私が活動場所を見た時に感じたのが、私たちがこんなところに入っていいのかということだ。余震もなく事故はなかったがこの石を踏んで大丈夫か、動かして大丈夫かと心配なことが多くあった。普段実習で「二次的災害危険なし」と流して言ってきたが、本当に二次的災害の危険がある場所を経験して二次的災害がどんな事になるのかよく理解することができた。

２つ目は被災された方々とのコミュニケーションだ。特に感じたことは子供の対応だ。子供たちは被災してから地震の時のことを話す子供もいて、大人とのコミュニケーションだけでなく子供とのコミュニケーションの方がより難しいと感じた。ボランティアの人たちはその日が終われば「終わった」となるが被災された方たちはまだまだ終わっていない。私はそれを絶対に思わないようにこれからもできる事をなんでもするという気持ちで次のボランティアにも参加したい。

7,　体育学部スポーツ医科学科　２年　加藤　有稀

私は今回のボランティア活動に参加して、たくさんの事を学びました。

１つ目は、地震の恐ろしさです。テレビでは報道されない部分も被災地に足を踏み入れた事で身をもって感じることが出来ました。

２つ目は、人の温かさです。大変な思いをされた被災者の方々は暗いイメージがありました。しかし、東京から来た私たちにたくさん感謝の言葉をかけて下さり、助け合って生活されている姿がありました。どんなに大変なことが起きても思いやりの心を忘れない被災者の方に感動しました。また、全国から様々な職種の人が熊本に集まってきて、それぞれ自分の出来ることで支援していて、日本の団結力を目にしました。

しかし、考えさせられる部分もありました。１つは避難所の設営です。避難所には多くの人達の生活が詰められていました。しかし、まだまだ配慮が足りなかったと思います。避難所には、老若男女が集まっています。その中でどうしても弱い立場の人が我慢をする状況が多かったです。個人のプライバシーを守る事は避難所の在り方として第一の課題であると思います。プライバシーを守る工夫が、避難所で生活している人たちの、心と体の健康を守る事に繋がります。私たちも非常に小さなことですが、少しでもストレスの少ない生活が送れるよう、支援してきました。必ずまた災害は起きます。その時に活かされてほしいです。個人の力は本当に微力であると痛感しました。しかし、被災者に寄り添い、求められていることに対して自分が出来る限りのことを尽くすことが、災害ボランティアであると思います。行かせてもらって本当に良かったです。

8,　体育学部スポーツ医科学科　２年　小宅　芹菜

４月中旬に熊本で起こった震災以降、多くの人々と同様に、何か自分にできることはないかと考えていました。幸い、国士舘大学でボランティア派遣の募集があったので応募し、活動に参加させて頂きました。

今回「災害ボランティア」として活動に初めて参加し感じたことは、女性のボランティアも必要であるということです。「災害ボランティア」という言葉を聞くと瓦礫撤去などの力仕事などをイメージしがちですが、ボランティアには様々な種類のお手伝いがあり、中には女性にしかできないこともあります。例えば、避難所には授乳室がありませんでした。また、トイレをした際に流してくれるのは男性ということでした。被災者の中には「ボランティアにたくさんの人が来てくれるのはとても助かる。だけどもっと女性の細かい所まで気にかけてくれたらもっと嬉しい。」と言っていた方もいました。同じ性別だから気づくことはたくさんあると思います。だからこそもっと女性のボランティアも必要であると私は感じました。

私たちはボランティアから帰ってきたら今まで通りの生活に戻ります。ですが、被災者の方々はそういうわけにはいきません。この貴重な経験を思い出として終わらせるのではなく、まだまだ自分にできることを考え、行動していきたいと思います。

最後に、今回災害ボランティアをさせて頂くにあたってたくさんの方々にお世話になりました。周りの方々の支えがあったからこそたくさんの事を学ぶことができ、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

9,　体育学部スポーツ医科学科　３年　橋本　梨子

今回、熊本地震の災害ボランティア活動に参加してたくさんのことを学ぶことができた。１日目は瓦礫の撤去、２日目は子どものお世話、３日目は益城町でダンボールベッドの作成、４日目は山西中学校で避難所運営をした。災害ボランティアに行くのは初めてだったので、崩れている家、積み重なった瓦礫を見た時は正直、唖然とした。私が熊本での活動を通して一番記憶に残ったのは、４日目の山西中学校での避難所運営だ。最初は支援物資を運んだり、掃き掃除を行った。その後は炊き出しの手伝い、ボランティアに来ていた人のたこ焼き作りの手伝いをした。そして最後に避難所にいる方とお話ができる時間を頂いた。被災者の方と直接お話しするのは正直少し怖く、緊張した。一組の被災者の方が地震発生時の話をしてくれた。私はその話を聞いたとき、どのような言葉を返せばいいのか分からず、うなずくことしか出来なかった。そしてその時、自分のボランティアとしての無力さを感じた。東京に戻って、被災者との関わり方を調べた時にこう書いてあった。「被害にあった時の話を一人で抱え込むのではなく、それを聞き出してあげることが大事。」これを見た時、自分があの時話を聞いたことは大切なことなんだと思うことができた。

今後、こういう災害は起きてほしくはないが、もし起きた時は今回学んだ事を活かしていきたい。

10,　体育学部スポーツ医科学科　２年　天野　大輝

災害が起きるとボランティアや支援物資が足りないとよく聞きます。私も何か送ろうと思ったことがあります。ただ、実際に被災地へ行ってみると、ボランティアや支援物資の全てがありがたいものではないと感じました。ありがたくないというのは悪い表現になってしまいますが、支援物資の中には状態の悪い物や色々なものを詰め込んだ段ボール、使いかけの消耗品など正直送られてありがたくないものもあったのではないかなと思いました。避難所には支援物資が山積みになり、むしろ避難している方々の生活の妨げになっていたのかも、とも感じました。私は、主に被災地の方と話したり、子供たちの健康管理、避難所の設営や支援物資の整理などの活動をしました。被災地の方々とのお話では、何も言葉を返すことが出来ませんでした。どう返したらいいのかもわかりませんでした。ですがとても良い経験になったと思います。子供たちの健康管理では、家の整理で子供たちの面倒を見てほしいという要望に応えるため預かり所に行き、そこで子供たちと遊んだり、掃除をしたりしました。楽しませ過ぎるなと言われていましたが、小さい子と遊ぶのが好きだったため引き際が分からず、一緒に楽しんでしまいました。避難所の設営や支援物資の整理では、体育館にある支援物資を種類やサイズごとに分けたり、移動させたりという作業を行いました。また、仮設トイレの清掃も行いました。色々な貴重な体験が出来ました。あってはならないのですが、もしまた災害が起こった際には、ボランティアに参加します。被災した方の立場に立って物事を考えるようにしたいです。

11,　体育学部スポーツ医科学科　２年　田口　晴樹

自分は今回のボランティア活動で様々な場所に行かせてもらいましたが、言葉では同じボランティアという「くくり」でも、実際はその現場によって相手のニーズは全然違うため、活動の内容も違い、そのためコミュニケーションと常に何が出来るかを考えることがすごく大事だということがわかりました。これは行く前にも分かっていると自分では思っていました。しかし実際は表面上でしか分かっていませんでした。コミュニケーション一つを取っても、聞いていいこと、まだ触れない方がいい事の区別が難しく、そのため、挨拶などもっと簡単なことで仲を深めていき、話しやすい雰囲気を作るなどして、とにかく聞いてあげる姿勢に徹するなど普段のコミュニケーションでは意識しない事が多く、新しく学べたことでした。行く前はボランティアと言えば瓦礫撤去でしたが、それだけでなく避難所の運営、子供の預かり、情報整理などたくさんあり、どれもが等しく重要で大切ということを知りました。被災地には独特の雰囲気があり、ストレスなどをいかに減らしてあげるかなども大切だと感じました。

この経験を次のボランティアや消防士になる時の意識に繋げていきたいと思います。

12,　体育学部スポーツ医科学科　３年　中澤　歩

ボランティア活動と言われて、私が熊本に行く前のイメージは、瓦礫撤去や炊き出しの手伝いでした。しかし、被災者の方々が求めているものは他にもたくさんあり、驚きました。

私が４日間で行った活動は、子どもの健康管理、避難所支援、瓦礫撤去です。それぞれの活動で感じた事、学んだ事は多くありました。その中で共通していたことは、被災者の方とのコミュニケーションの大切さ、ボランティア活動中の安全管理の重要性です。

また、ボランティア活動を行っている中で、ボランティアとは何なのか、ということについてすごく考えました。活動中で感じた事や周りの人の話を聞いて、ボランティアとは、被災者の気持ちを第一に考え、被災者が求めているニーズに全力で答えることだと思いました。そのことを踏まえ、今回の活動が被災者の方の気持ちを少しでも軽くできたらいいと思いました。

私は、ボランティア活動に参加して日々の生活や将来についての意識が変わりました。今、自分がやるべきことを全力でやり、自分が社会に出て震災が起きた時、できる事の幅が広がっていると思います。その時に、大きな戦力になれるように、自分には何が出来るのか、何をすべきなのかこれから考えていきたいです。

今回、無事にボランティア活動を終えることができたのは、たくさんの方のサポートのおかげです。ボランティア活動に参加することができて良かったです。

13,　体育学部スポーツ医科学科　３年　中川　洸志

私は熊本出身で大学進学を機に上京してきた。両親から「東京は地震が多いから気を付けてね」と言われるほど熊本を含む九州は地震が少ない所だった。そんな熊本で震度 7 の大地震があったとニュースで見て信じられなかった。家屋倒壊などの被災も大きく、早く熊本へ行き支援活動を行いたいと思っていた。

自分のイメージでは、ボランティアは瓦礫撤去など力仕事のイメージだった。体力には自信があったので力になれると思っていた。しかし、現地に入ると様々なニーズがあり、イメージが変わった。避難所の支援や本部の仕事、子どもの健康管理など予想していなかったニーズが多かった。いかにニーズに対応できる能力を付ける必要がある。また、コミュニケーション能力の重要さを強く感じた。被災者の方々の話を聞いたり、他のチームと合同で活動したりするときに必要になる。

また、組織としてのボランティア活動を行い、ボランティアのあるべき姿を実感することができた。組織図やクロノロなど、初めて行うことだったが、より組織として効率よく活動するため、後に活動の記録を残すことが重要だと感じた。

被災から 2 週間で現地に行かせて頂けた国士舘の組織力に非常に感謝しています。また、地元のために多くの仲間が力を貸してくれてとても嬉しかったです。ありがとうございました。

14,　体育学部スポーツ医科学科　３年　北川　未來子

今回私は主に 3 つの内容のボランティアを行った。①物資の仕分け、②避難所の設営、③子どもの健康・安全管理である。それぞれの行ったことと、そこで感じたことを次に述べる。

①　物資の仕分けを行ったのは中学校の体育館である。体育館に入ると大量の支援物資が積まれていて圧倒された。この大量の支援物資をみて、日本各地からの優しさを感じあたたかい気持ちになった。ただその一方で、すでにガス、電気などのライフラインは復旧しているのにも関わらず、ガスコンロが届いたり、賞味期限切れの食料が大量に届けられているのも現況である。また、ニーズはあるが在庫が少ないものはあえて出さないということも行っていた。これは在庫が少ない物を出してしまうと新たなトラブルの原因となってしまう可能性があるからだと聞いた。これについては運営側だからこそ見えた現況だと感じた。物資を送ることは東京からでも出来る身近な支援である。だからこそ、今の被災者のニーズ、自分がもらって嬉しいものを選んで送ることが必要だと感じる。

②　避難所の設営では主に仮設ベッドの設営、配置、被災者との交流を行った。仮設ベッドの有無で疲れがかなり変わってくると聞いてやりがいのある作業だった。また、作るだけでなくそのベッドをどのように配置するかを考えていく時に北枕なども考えながら活動できたことが収穫だと感じた。

③　子どもの健康・安全管理では実際に被災した子ども達と触れ合って、普段と異なる状況からかテンションが高い子どもが多いという印象を受けた。ただ、時々ふと「夜になると怖い」などという場面が何回かあったのでその対応についてうやむやにするのではなく、あえて聞いてあげてその子のストレスを減らしてあげる方法もあると今回学んだ。

全ての活動に共通して必要だと感じたのは「コミュニケーション」と「被災者側の気持ちになって考える」ことだと感じた。ニーズを聴取したり、ストレスを減らしたりと活動には必ずコミュニケーションを取るべき所がある。

被災者の気持ちになって考え、活会話することでより良い活動を行うことができると感じた。

15,　法学部　法律学科　2 年　上村　明

熊本地震のボランティアに行って、当たり前の生活が恐ろしいと感じました。避難所生活では、体育館の中で生活している人がいらっしゃいました。物資が充分ではなく、自身は全く食べず、子どもに沢山あげている人が多く見受けられました。

震災が起こる前は、食べものにも不自由がなく、温かい風呂に入り、何の不自由もなく生活していたのが突然、空腹に見舞われ、風呂も入れず、不便な生活を強いられているというのを目の当たりにしました。

もし、私が普段の生活が当たり前ではなくなったとき、自分は何ができるのか全く見当もつきませんでした。早く熊本の人たちが、元の暮らしい戻れるようになって欲しいです。

16,　体育学部スポーツ医科学科　３年　大西　裕大

正直、自分のことしか頭になかった。このボランティアを通じて自分自身、人間的に成長できればという思いで熊本に向かう車両に乗った。しかし、現地に着くと目にするのは様々な爪跡。それによって一気に自分のことしか考えていない自分が幼稚だったと気づき情けなくなった。具体的な活動が始まると多くの課題が浮き出てきた。特にコミュニケーション。他のボランティア団体、復興活動を取りまとめる本部、そして現地の被災された方々などと上手く意思疎通できないことで、被災地のニーズに応えられずにいることに無力さを痛感した。同時に、人との繋がりについて深く考えさせられたことを覚えている。この活動を通して特に印象に残っていることは、現地で被災された方と直接会話したことで、小さい子ども、高齢の方、自分たちと同じくらいの歳の人、みんな自分たちボランティアに対して気を遣っていることが伝わってきて、絶対に縮まることのない距離感を感じた。相手の気持ちを理解したくて近づこうとするほど、絶対に理解することはできないのだと思い知らされた気がした。また、上手く相手のニーズを聞き取ることができない自分のコミュニケーション力のなさに腹立たしさも覚えた。この活動を終えて確かに分かったことは２つある。１つは、ボランティア活動とは被災地、被災者のためになることを常に考え行動することだ。そして、活動してみるとその中で必ずコミュニケーション、人数の調整、責任問題などの様々な課題に直面するが、それでもまた動いてみる。この繰り返し自体がボランティア活動であり、よりよい活動を生むための最善の方法なのだと理解できた。２つ目は、ボランティア活動は一人ではできないということ。どんな活動にも多くの人が関わっていて、活動したくてもできない人もいる。そういった意味では自分達はとても恵まれていて、現地の人にお世話になりながら、活動に専念できた。感謝の気持ち、活動させて頂くという気持ちを持ち続けることはボランティア側の義務であると感じた。

今回の活動は、自分の成長のことしか考えていないところから始まり、活動の中で未熟さを改めて実感させられ、活動を終えて自分は一人ではない、支えられているんだということを強く気づかされ、結果成長できた。人間的に成長できた。人との繋がり、ボランティア活動について考えさせられた。この一週間を忘れないだろう。被災地の方々を始めこの活動を支えて下さった全ての人に感謝したい。本当にありがとうございました。

17,　法学部現代ビジネス法学科　２年　山川　大介

私は、今回のボランティア活動を通して、大きく３つのことを学びました。

１つ目は、ロジスティクスや情報管理の大切さです。ボランティアとして、現地で動くだけでなく、現地に行くまでの車の運転者交代、ガソリンの管理、臨機応変なルート設定といったロジスティクスがとても大切なことを知りました。また、メンバーの管理、ボランティア活動を誰が何を行っているのかの伝達、次の人への引き継ぎ等の情報管理もまた、重要であり必然であることを学びました。

２つ目に、ボランティア活動は、自ら動いてニーズを探し、動かなければいけないということです。現地のボランティアセンターへ行き、仕事を頼まれたとしても、現地の本当の要望を把握していないことがありました。また、判断も適切でない場合がありました。なので、ボランティアだからと受動的になっていると、本当の意味で現地の人の支援にならない場合や仕事がない場合があるので、自ら動くことが大切だと知りました。

３つ目は、被災者への対応の難しさです。今回、子守の際に途中で、親とお話させて頂いたり、実際に避難所の方と会話する機会がありました。その時に、私はうなずくことしかできなかったり、自分の中で満足のいく返答をすることができませんでした。授業でいくら対応の仕方を学んだとしても実際にはできないと身をもって体験しました。今後は、この反省を生かしていきたいと思います。

私は今回、初めて被災した現地を見ました。そこで写真では分からない現実を受け止められず、少し時間が経ってから理解することができたほどでした。しかし、これを見たからこそ、自分が将来被災者になった時や、またボランティアとして活動するときに役立てていきたいと思いました。

今回は、このような機会があり、参加できてとてもいい経験になりました。

18,　体育学部スポーツ医科学科　２年　横溝　光希

被災地でのボランティア活動を通してとても感じたことは、ボランティア活動は、するのではなく、やらせて頂くということです。自分たちが活動する上でニーズと合わないことをするだけでは意味がないと思うし、支援物資を送るにしても、汚れているものや使えないものを送っても意味がないと思いました。

実際に現地に行って、子どもの健康管理をした時に、最初は遊んでいるだけだったのですが、遊ぶにあたってのスペースの確保、衛生面に配慮、安全面ということを考えたら新たにやった方がいいと思うことが出てきました。

次に瓦礫撤去に行った時にとても感じたことは「瓦礫はごみじゃない」ということです。瓦を落としているときに家主の方が作業を見ていて、とても複雑そうな顔をされていて、自分たちもうまくコミュニケーションが取れずに終わってしまったのがとても心残りになってしまいましたが、被災地にボランティアに行かせて頂きとてもいい経験をたくさんできたので、また災害が起きた際には今回の経験が活かせるようにしたいと思いました。

19,　体育学部 こどもスポーツ教育学科 3年　萱沼良輔

被災地での活動は考えさせられるものだった。仲間たちと話し合いや意見交換を行うことで考えや学びをさらに深めることができた。

今回の活動で一番感じたことは「コミュニケーション」が重要であるということである。これはボランティアと本部間、ボランティア同士、本部内、ボランティアと被災者などすべての関係にいえる。しかし、実際の現場では指示待ちや本部と現場での意見の相違など多くの問題が見受けられた。常にコミュニケーションをとれる関係であれば、情報伝達などがスムーズに行え、作業効率も上がる。被災者の本当のニーズも聞き出せるかもしれない。

ただ今回の活動では改善は難しかった。その原因は２つ考えられる。

１つ目の原因として、本部が十分にその役割を果たせず、改善することを考える余裕がなかったからである。

２つ目に私たちはボランティアとして活動しており、本部の運営を任されたわけではないということである。もちろん依頼があれば行うが、それは現地の人々で行うことだと私は思う。私たちの役割は復興に向けた支援である。すべてを支援するのではなく、被災者の出来ることや仕事を取らないようにすることも大切である。

上記の原因から改善は難しかった。コミュニケーションの不足はヒューマンエラーなどにも繋がると考えられる。また、地元の人たちを自律させることこそがボランティアの真の活動目的であると考えている。

私は小学校教員を目指しており、卒業研究では防災教育について研究しようと考えている。今回の活動で感じた「コミュニケーション」の重要性は学校などの教育機関において伝えていかなければならない。地震大国とも言われる日本で義務教育の幼い年齢から防災教育を取り入れ、災害に対する意識を植え付けなければならないと考える。

防災教育に力を入れることで、もし今回のような災害が起きても「自助」、「共助」、「公助」を理解し、落ち着いた対応ができ、コミュニケーション能力が養われていればスムーズな情報伝達や共有が可能であり、被害を最小限に抑えることもできる。

私はこれから教員の視点で取り組み、将来の教育現場において今回の活動で感じたことや学んだことを活かし、防災教育を通して災害の被害を少しでも減らせるようにしたいと考える。

また、私たちは今回多くの方の支えがあって、このような貴重な経験ができたことを忘れてはいけない。支えてくださった方々に感謝したい。

被災地は復興に向けてまだ動き出したばかりである。これからも自分の出来る最大限の支援をしていきたい。

20,　体育学部　スポーツ医科学科　４年　富村駿暉

私は今回のボランティア活動を通してボランティアを様々な角度から見ることができ、また経験することができた。私は主に益城町にある避難所対策本部という所に入り活動した。活動内容としては、過密化する避難所での生活のストレスや余震の恐怖から逃れるために１泊２日程度で温泉地へ避難する“リフレッシュ避難”という活動の事務作業や電話対応、避難所の増設、段ボールベッドの作成などを行った。災害ボランティアというと瓦礫の除去等の力仕事をイメージしていたため、避難所に関するボランティア活動の依頼を受けた時には多少の物足りなさを感じていたが、実際に避難所に行ってみて、多くの被災者の方々が限られたスペースの中で互いに気を遣いながら生活している所を目の当たりにしてみて、自分たちが任されたボランティアの内容がいかに大切なものであるかを理解することができた。どのような内容のボランティア活動であっても自分達に今できることが何かを考え、被災地の方々の事を理解して活動することが出来れば、その活動は被災地の復興に繋がっていくのではないかと感じた。

今回のボランティア活動を通して私がもう１つ学んだことは、“コミュニケーション能力”の重要性である。被災地の方々としっかりとコミュニケーションをとることが出来れば本当に困っていることが何なのかもお話いただける。また、他のボランティア団体と活動する際にも積極的にコミュニケーションをとることで作業効率が上がり、被災地の方々にとってより良い活動が行える。いかにして信頼関係を築くかが重要であり、信頼関係を築くためには“コミュニケーション”が大切であることを改めて学ぶことができた。

今回のボランティア活動を通して様々な経験をすることが出来たが、この経験を自らの経験として終わらせるのではなく、多くの人に伝えていくことで防災に対する意識を上げ、今後起こり得る災害に備えていくことが最も重要である。未だに余震が続くなど危険な状況でありながらもボランティアに連れて行って下さった先生方や現地でご協力いただいた方々への感謝の気持ちを忘れることなく、今後も熊本の復興のために何が出来るかを考え日々精進していきたい。

21,　体育学部　スポーツ医科学科　４年　渡邉憲吾

今回、私は熊本地震のボランティアとしてゴールデンウィーク中活動していく中で、与えるよりも学ぶことの方が多くあった。

私の行った活動としては、瓦礫の撤去活動、避難所での物資の仕分け、掃除、配膳、食事の準備、ニーズの聞き出しなどである。どの活動においても重要となるのが「コミュニケーション」である。私の行った活動の中でも、最もコミュニケーションが重要だと感じたのは、活動３日目に IVUSA の活動の中での失敗経験で感じたものである。IVUSA では主に屋根の上に残った瓦を撤去することにより二次災害を防ぐというものであった。そこで３件行った活動の中でも３件目での活動が記憶によく残っている。この３件目は特殊で、今までの家とは違い、瓦を全て落とすのではなくある種類の瓦を残して、使えるものは残してほしいとのことが活動をしている途中で情報として入ってきたのである。しかし、とてつもない速度で活動をしていたため、残しておいてほしいと言われた瓦のほとんどを撤去してしまった後だった。この経験で私は IVUSA という間に入っている人たちの間接的な指示で受動的に活動していたに過ぎないと感じた。次は直接的に被災者の方へ情報を聞きに行くという能動的な姿勢が大切であると思った。

22,　体育学部　スポーツ医科学科　４年　古元謙悟

ボランティア１日目、私は西原村村民体育館と西原村構造改善センターにて支援物資の搬入、整理整頓を行った。支援物資は充足していたようであった。午後からは支援物資の水を運ぶ手伝いをした。被災された方は、水だけを持っていく訳ではなかったので、自分たちにできることはマンパワーとしてお手伝いをすることだとその時思った。

２日目は、１日目と同じように西原村村民体育館の併設の武道場でボランティアの依頼を受けた。武道場は地域の方が避難され生活していた。午前中は主に玄関、トイレ掃除を行い、机なども次亜塩素酸にて消毒を行った。

３日目、４日目は災害ボランティアセンター本部にてパソコンの入力を行った。入力内容は、ボランティア参加者の氏名、生年月日、住所、活動期間、資格、復路の高速道路入力である。災害ボランティアセンター本部でボランティアをさせて頂き、瓦礫撤去などの現場は見ていないが、感じたことがあった。一般ボランティアはテント泊をし、朝８時より受付を行う。定員を超えた際は募集を打ち切る。移動もバスで団体行動をする。今回、国士舘チームのボランティアは宿もあり、大変良い環境でボランティアをさせていただいた。この有難い環境を当たり前としないように後輩に伝えていきたい。

23,　体育学部　スポーツ医科学科　３年　齋藤汐海

私は、今回の熊本地震災害ボランティアを通じて、改めて“ボランティアとは何か”考えることが出来ました。被災地では災害によって普段の生活を失った人たちのために私たちの出来ることをする、それがボランティアに求められていることだと思います。ですが、それ以上の事をやってこそ継続的なボランティアだと思いました。

私は１日目の活動で被災地の現状を認識することや頂いた役割をこなすことで精一杯でした。しかし、日を追うごとに被災者の方たちがこれからも続く避難所生活で少しでも過ごしやすくするための工夫や、作業を効率よく行うため記録を残したりするなど、自然とボランティア活動に求めることがレベルアップしていくのを感じました。また、物理的な支援だけでなく、被災地の方が抱える不安やストレスに対し耳を傾け、その受け応えが正しかったのか葛藤することもありました。

私たちの活動は、初日から比較すると確実に内容の濃い活動になったと思います。ですが、被災地を離れて活動を振り返ると自分たちの活動は全体のほんの一部でしかなく、微力であったことを感じました。ボランティア活動は自己評価できることではないですが、今回の活動を通じて、被災地で活動することがボランティアの全てではないと気づきました。たとえ被災地の即戦力にならなくても、被災地の活動をもとに次の災害に備えることもボランティアの活動の１つで、それが継続的なボランティア活動の形であり、“防災”だと思います。また、今後もボランティア活動を続けていく上で、支援する側も周りからの支援・協力なくしては活動できないということも忘れてはいけないことだと思いました。私もボランティアの１人として、今回の活動で学んだことを活かせる環境を増やしていきたいです。

24,　体育学部　スポーツ医科学科　2年　中野　亘

熊本で過ごした 5 日間で、様々な角度から色々なことを知ることができた。その中でも自分が一番強く感じたことは「自分が誰かのためにと思ってする行動に責任感を持つ」ということだ。これは、日頃の生活の中でも同じだと考える。

滞在 4 日目、自分は西原村にある災害ボランティアセンター本部の 2 階で支援物資として送られてきた何千枚ものタオルを、4 つの避難所へ分配する作業をしていた。まず初めに、清潔感があるものとそうでないものに分けたのだが、大半のタオルが体をふけないようなものばかりで衝撃をうけた。テレビで支援物資がたくさん集まっているという報道だけを見ると、被災した方々はとても助かっているという印象だけ残ってしまうが、実際はその全てがためになっている訳ではない。使えないタオルのいくつかはぞうきんとして使えるが、余ったたくさんのタオルは処分しなければならない。処分をするのはもちろん現地の人達だ。「このタオル古いけど使っていないから送ろう」「何か支援物資送りたいからこのタオルでいいや」などといった軽はずみな気持ちで送られてきた物は、実際使えないものばかりだと僕は思う。

支援物資だけに限らず、「誰かのために」という気持ちで行う事全般に言えることだが、やるからには相手の立場になって良く考えてから行動に移すべきだと僕は強く思う。

今回、災害復興ボランティアとして現地に向かい活動をしたのは、2 回目だったが、やはり前回と同様学べることがたくさんあった。それは防災関係の事ももちろんそうだが、もっと根本にある生きていく上で大切な、他人への思いやりや気遣いである。自分が感じたことだが、被災者の方達が比較的前向きで、自分達ボランティアに笑顔で接してくれるのは、気遣いが表れているのではないかと思う。

今回地震が起きてすぐ現地に向かえたのも、国士舘大学のスポーツ医科学科にいたからできたことだ。

この学科の学生だからできることを、卒業するまでにたくさんしていきたい。

25,　体育学部　スポーツ医科学科　3年　中木 咲歩

今回、熊本地震災害ボランティアに参加して、一番強く感じたことは「ボランティアは、自己満足ではなく、誰かのために尽力する」ということです。この 4 日間、私は山西小学校、益城町での避難所支援・設営、西原村ボランティアセンターでの事務作業、瓦礫撤去地の視察（雨天の為）と多くの貴重な経験をさせていただきました。災害において、重要視されるのは、「自助」「共助」「公助」。まずは、第１に自分の身は自分で守ること。現地にいる間は、いつ地震が発生してもおかしくない状況にいたため、ヘルメットを常備したり、倒壊している建物にはできるだけ近づかないようにしたりと、安全管理を常に心がけていました。次に「共助」。避難所で被災者の方々と一緒に昼食の手伝いをさせてもらい、同じ境遇にいることからこそ、共に助け合い、協力し合って過ごしているのだなと感じました。私はボランティアとして熊本へ来ている身であるため、被災者の方とどう接していいのか、笑顔で活動をして不謹慎でないか、という葛藤を感じることも多くありました。そこでもし、私が被災者の立場に立ったときのことを考え、活動するように心がけました。今回、学生達の間で多く問題となったのは、「自分のやりたい活動よりも、被災者のニーズに合わせて自分の長所を活かす」ということでした。今、被災者の方々が一番何を望んでいるのかをまず考え、それに対して私達が活動をしていくべきであるということを学びました。ボランティアセンターで活動させてもらった時にボランティアをしたくてもできない人を多く見受けました。そのような人達がいる中で私達は 4 日間も活動できたことに感謝し、この経験を次に活かしていかなければならないと感じました。先生方、坂梨教務助手のご両親、多くの方々のサポートにより、全員が無事に帰ってくることができました。また 1 人 1 人が多くのことを経験し、学びました。全てにおいて、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

26,　体育学部スポーツ医科学科　３年　矢後　履侑

今回、熊本へ行ってみて、とても強く感じたことは熊本へ応援に来てくれている他県からの県職員ボランティアと私たちボランティアとの連携（伝達）の悪さだと思いました。それは、総合体育館の復興のためロビーや廊下に避難されている方たちに対し、別の新たな避難所へ移ってもらうよう促すという任務だったが、体育館へ配属されている職員たちよりも先に行ってしまうと、「混乱が起きてしまう恐れがある」ということで活動は少し待ってくれということになり、数時間の待機時間が発生してしまいました。

結局は、私たち側の局長にお越し頂き活動を行うことができましたが、体育館へ長く避難されている方も多く、周囲で友達になっていたため、できるだけここは動きたくないという意見が多く、混乱は全く起きませんでした。

私たちボランティアはこうなることを予測していましたが、やはり公務員の方は安全第一というか、堅い考えの方が多く体育館の復興を自分で障害してしまっているように感じました。

別の日には瓦礫撤去を行いました。倒れているブロックは叩き壊し、瓦や木材等々は分別して廃棄場へ。加えて、倒壊した家屋からは思い出の詰まった家主の物が発見され、それについてのエピソードを話してくれた。その話を聞くことは、持ち主の方は「とても気が楽になる」と言っていて、僕は倒壊したものの整理も大事だが、それに付随してこういった話を聞いて、被災者の気持ちを少しでも楽にしてあげることもボランティアの重要な仕事の一つではないかと思います。また、被災者の方と話すと、とても現実的で教科書で見るよりももっと鮮明に自分に置き換えて考えることができました。

これによって、自分の住んでいる地域で震災があった場合のことを改めて考え直すことができ、今後の為に凄く役に立つ経験をし、更に先を考えること、連携の大切さを学ぶことができました。このボランティアで奉仕と学習とボランティアの経験を積んでこれたと思います。

27,　体育学部　スポーツ医科学科　3 年　奥津　元太

熊本地震のボランティアで私が行った行動は、大きく分けて 2 つあり、1 つは被災された民家の瓦礫の撤去作業と避難所の運営です。

瓦礫の撤去では、全壊にあった家を手伝うことを主にしていました。瓦礫と言っても元々は家であり、作業をしていても、ごく家庭にある物を撤去していて、それが一週間前には普通に生活をしていた面影が感じられました。熊本地震という一日で家が簡単にも壊れ、しかもそれが町単位で起こっていることを目の前にし、震災の被害を初めて感じました。

避難所の運営では、避難者の生活をより良くするために、清掃活動や物資の配置などを行いました。ここで学んだことは「避難所をどう元の状況に戻すか」ということです。行った場所は小学校で現場では物資は避難者にしっかりいきわたり、不足もなく避難所だけとしては、運営は十分行えていました。けれども、学校であるからには、運営を行いながら、学校として機能させるためには、避難所、物資の配置に問題が生じます。なので避難所と学校を両立するべく再設立をしなくはならないことです。初日はそこまで考えきれず配置をしたため、また移動をしなくてはならなく、動かすために騒音やストレスを避難所に与えてしまった。避難所の運営を自分でゴールしていて、その先が見えていなくなっていたのは勉強になりました。

今回の熊本は地震の被害が大きく、益城町は特に災害が大きかった。ボランティアに行って熊本で全壊した家を見たこと、運営するスタッフの手がつかない避難所を体験できたことはとてもいい経験になりました。日本は災害大国であるため、また災害が何処でも起こります。その時に熊本をボランティアで訪れたことは大いに役に立つと私は思います。

29, 体育学部　スポーツ医科学科　3 年　増田　船介

一週間ボランティア活動をさせて頂いて、感じたことは自分たちは微力であることだ。

なぜそう考えられるかというと、一週間全て違う活動をさせてもらった際に自分たちは依頼をいただいた依頼を 100%で答えられる内容かどうか、答えられたかどうかがわからない。ボランティアセンターを通じて活動するため被災された方々の直接の声でないからだ。支援物資の移動の活動の時では、活動している際も、終わった後も直接の声を聞いたわけではなかったので、これでよかったのかと疑問が心の中にある。

自分たちが活動してきたことは次に来て下さるボランティアの方々にしっかり継承しなくてはならない。初めてきてくれた方が一から考え、同じことをしなくてはいいようにするためだ。これは片付けの時も同じと考える。

自分たちのようなボランティアの人だけが活動するのではなく、普段の生活に戻れるように、少しずつ一緒に活動できるように今回の活動で自分は、もし自分たちの住んでいる所が、被災などにあってしまったら、受け身ではなく能動的に全体を動かせるように、日々勉強しなくてはならない。

28, 体育学部　スポーツ医科学科　2 年　早崎　賢太朗

私は、今回 TV の画面でしか見たことのなかった非現実的な町、家、道路を見て、本当に現実なのかと唖然とした。実際に目の当たりにして大きな衝撃を受けたのを覚えている。そんな中でも、一生懸命に助け合いながら生活されている方々を見て、ボランティアさせていただいた立場の私が元気をもらった。活動としては、避難所のお手伝い、トイレ掃除、ダンボールベッドの作成、瓦落とし、たこ焼き作りを行った。私たち、一人一人の活動は微力ではあるが、少しでも被災された方々のためになればという思いで、活動させていただいた。活動していく中で、私が感じたのは周りの先輩方、同期の意識の高さを日々痛感した。一つ一つの行動、発言、立ち振る舞い、全てにおいて、私の今までの学生生活や、全てにおいてのレベルの低さを身にしみて感じた。限りある時間の中でどれだけのよりよい活動を被災された方々のためにできるのか、活動一つ一つに対しての良いところ悪いところ、雑になりがちなミーティングもその日の活動一つ一つに目を置き、私たちに何ができるのかを、自分達の話し合いの中で出し合える周りの意識の高さを 1 週間という時間の中で感じることができた。

地震が起きて、1 ヶ月以上が経ち、毎日毎時間のように放送されていた熊本の様子も除々になくなり、余りみることもなくなってきた。しかし、まだ被災された方々は普段の生活を取り戻すために、頑張っておられる中で私達は平凡な生活を送っている。私に今、何ができるのかを問われた時に直接何ができるわけではなく、私が出来ることは見てきたもの、感じたことを周りに伝え、頭の中から風化させないことだと思っている。今回こうして少しでも被災地へのボランティア活動に携わらせていただいたことに感謝したい。

30, 法学部　法律学科　2年　室井　優哉

私は、今回のボランティア活動を通じて、自分の覚悟の甘さを感じた。なぜなら、倒壊した家などを見たとき、そこには家庭があって、その人はどんな気持ちなんだろうと考えたら、胸が痛くなったからだ。その時、体育学部の人に「それは覚悟が足りないからだ」と言われ、とても心に響いた。そして、ボランティア活動を通じて学んだことはいくつかある。

「家の瓦礫は、その人、つまり家の持ち主にとっては、大切な宝物であり、石ころではない。」その通りだと思った。さらには、「ボランティアをしたくてもできない人がいることを忘れるな。」この2つの言葉に、当たり前のはずなのに、気付けなかった悔しさもあり、体育学部の学生たちはすごいなと思った。原点に帰ることの大切さを感じた。

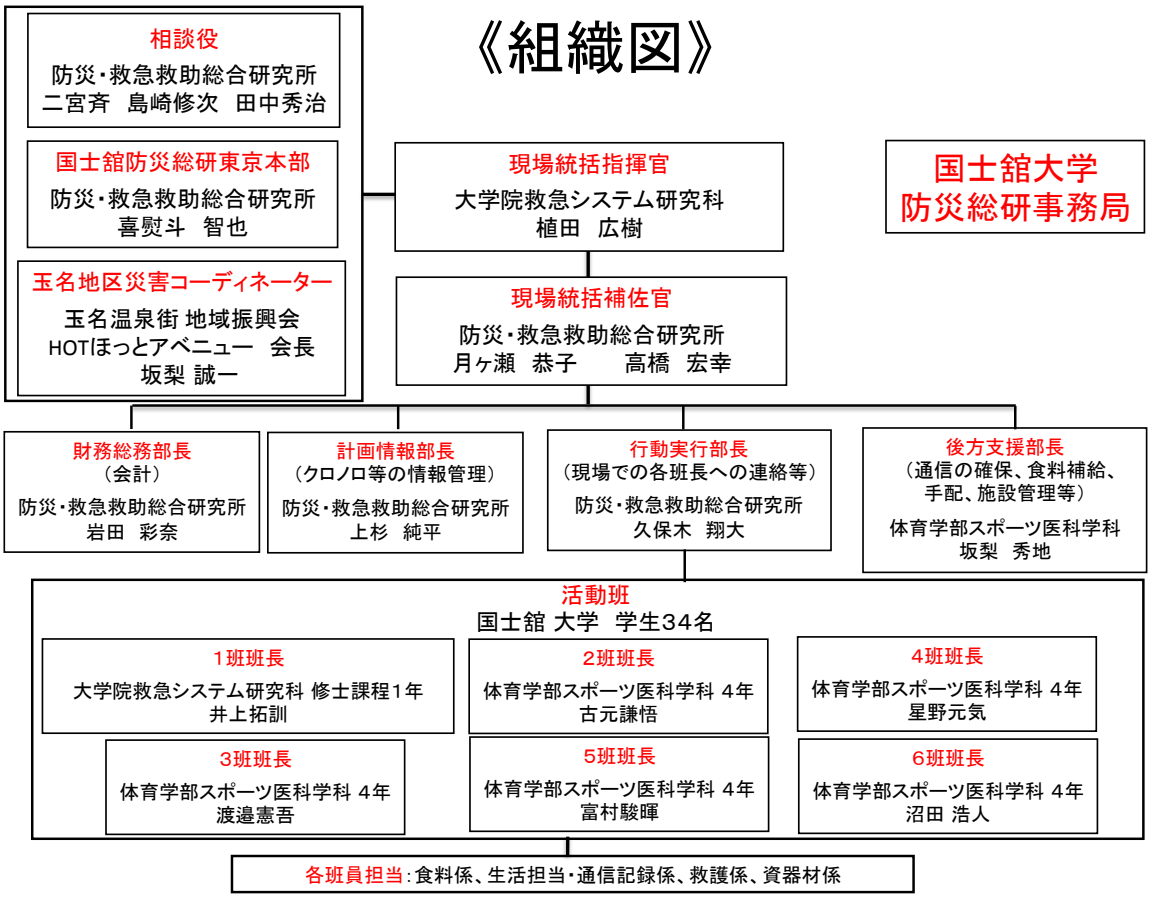
公民館で、子どもたちと遊んだとき、子どもたちの家に行ったが、途中に倒壊している家があり、子どもたちは現状を理解しているのか、どのように捉えているのかと思った。

そして、子どもと遊んでいるだけでボランティアになるのかと思っていて、現地の人に「子どもの面倒を見るほうが大変だ。」と言われたが、納得はできなかった。同行した他の学生は、瓦礫の撤去をしているのに、自分はただ遊んでいるだけ。そんな時に、先生から「大事なのはやった量ではなく、気持ちだ。」と言われてボランティアの真意が理解できた気がした。

最後に、私は、このボランティアを通し、覚悟、人の命、大切なもの、協力、ボランティアをするということ、自分にできることなど本当に勉強になり、人として大きくなれた。

Ⅳ. 国士舘大学　災害ボランティア活動資料

《組織図》



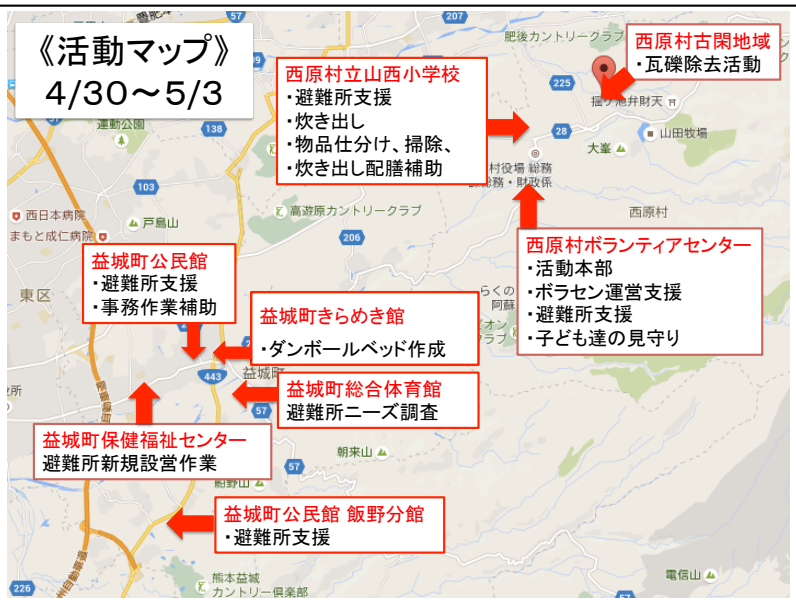
《クロノロジー》

平成28年(2016年)熊本地震 国士舘大学防災・救急救助総合研究所 クロノロジー				
日にち	時刻	被災地状況	防災総研	備 考
2016/4/14	21:26	熊本県熊本地方でマグニチュード6.5・最大震度7(熊本県益城町)の地震発生		
	22:07	熊本県熊本地方でマグニチュード5.7・最大震度6弱の地震発生		
	22:52		国士舘防災・救急救助総合研究所、災害対策本部設置	防災総研教職員により設置、災害対策本部会議を検討
2016/4/15	0:03	熊本県熊本地方でマグニチュード5.7・最大震度6強の地震発生		
	8:15		第1回防災総研災害対策本部会議開催(災害ボランティア派遣の有無について)	災害ボランティア派遣の決定と日程の検討 出席者：田中先生,二宮事務長,喜熨斗先生,坂梨先生,月ヶ瀬職員,久保木職員,上杉職員
	9:00		災害ボランティア活動に向け、現地の情報収集、移動手段やボランティアの応募など作業開始	
	10:10			気象庁はこの地震を「平成28年(2016年)熊本地震」と命名
	10:43		国士舘大学防災総研対策本部連絡グループ作(Facebook)	情報共有を計るためFacebookのグループ作成
	15:00		先遣隊・災害ボランティアの日程について検討	先遣隊の活動日程・人員(二宮事務長,永吉先生,坂梨先生,上杉職員4名)が決定。災害ボランティアの日程(案)決定。 先遣隊が現地視察後、ボランティア支援の有無を判断。 出席者：二宮事務長,喜熨斗先生,坂梨先生,月ヶ瀬職員,久保木職員,上杉職員,岩田救命士

日にち	時刻	被災地状況	防災総研	備 考
2016/4/16	1:25	熊本県熊本地方でマグニチュード7.3・ 最大震度6強の地震発生		震度6強：南阿蘇村(みなみあそむら)、菊池市(きくちし)、 宇土市 (うとし)、大津町(おおづまち)、嘉島町(かしままち)、 宇城市(うきし)、合志市 (こうしし)、熊本市(くまもとし)
	1:46	熊本県熊本地方でマグニチュード6.0・ 最大震度6弱の地震発生		
	3:35	熊本県阿蘇地方でマグニチュード5.8・ 最大震度6強の地震発生		
	6:44		本震の影響により、熊本空港発着の全便欠航を 把握し、先遣隊とボランティア活動の日程変更を再検討	
	8:18		田中先生と二宮事務長（電話会談）先遣隊の派遣延期を検討	
	9:48	熊本県熊本地方でマグニチュード5.4・ 最大震度6弱の地震発生		
	10:00		先遣隊の派遣・活動内容決定について	先遣隊の派遣・活動内容(支援物資の提供と現地情報収集)が決定。 先遣隊（永吉先生、坂梨先生）2名の移動手段は 防災合研所有のトラックで支援物資運搬を行う。 出席者：二宮事務長,永吉先生,坂梨先生,上杉職員,山崎大学院生
	11:15		先遣隊、出発準備開始（支援物資のトラック搬入など）	
	13:04		先遣隊、国士舘大学多摩校舎から熊本県に向けて出発 （永吉先生、坂梨先生）	
2016/4/17	7:45		先遣隊、熊本県上益城郡御船町 御船町立御船小学校（避難所）に到着	
	9:53		熊本市社会福祉協議会は開設していないため、 多摩キャンパスに向け出発	熊本市内から北に向けて移動する人が多く、どのルートも渋滞。 この渋滞はしばらく続くとのこと（坂梨父情報）
2016/4/18	4:05		先遣隊、国士舘大学多摩校舎に到着・解散	往路:18時間41分、復路:17時間58分
	20:41	熊本県阿蘇地方でマグニチュード5.8・ 最大震度5強の地震発生		
2016/4/20	11:00		第2回防災総研災害対策本部会議開催（災害ボランティア派遣の活動について）	災害ボランティア第二次派遣隊の日程,交通手段,スタッフ人数の決定 出席者：二宮事務長,喜熨斗先生,坂梨先生,月ヶ瀬職員,久保木職員,
2016/4/21	16:36		学生ボランティアの募集開始	本学の「防災リーダー養成論実習」を受講した学生を対象にメーリングリストにて募集開始
2016/4/22	18:51		学生ボランティア募集終了	募集人数(34名)に達したため、募集終了
2016/4/28	10:00		第2次派遣隊、出発準備開始（支援物資のトラック搬入など）	
	16:45		出発前のオリエンテーション開始	多摩キャンパス301号室
	17:45		第2次派遣隊、多摩キャンパスを出発	
2016/4/29	15:09	大分県中部地方でマグニチュード4.5・ 最大震度5強の地震発生		
	16:10		拠点ベースの玉名市、つかさの湯駐車場到着	
	16:33		統括本部、西原村ボランティアセンターに向けて出発	西原村ボランティアセンターにて行われる会議に参加 参加者:二宮、植田、月ヶ瀬、上杉、坂梨
	18:01		西原村ボランティアセンター到着、会議出席	30日のボランティア活動内容が決まる（瓦礫撤去、避難所支援、子ども支援）
2016/4/30	5:45		起床	
	10:30		一日目 ボランティア活動開始	活動内容：熊本県庁（医療救護班災害対策本部）→益城町ボランティアセンター →公民館福田分館、西原中学校避難所支援、山西小学校避難所援、河原小学校避難所支援、子ども支援
	16:10		一日目 ボランティア活動終了	
	22:24		各宿舎にて就寝	
2016/5/1	6:15		起床	
	10:15		二日目 ボランティア活動開始	西原村ボランティアセンター本部支援、熊本県庁→益城町公民館飯野分館、山西小学校避難所支援、西原村 古閑地域瓦礫撤去、 西原ボランティアセンター付近の柔道場避難所、西原中学校、子ども支援
	16:10		二日目 ボランティア活動終了	
	23:30		就寝	
2016/5/2	6:30		起床	
	9:43		三日目 ボランティア活動開始	益城町公民館本館避難所支援、益城町輝らめき館ダンボールベッド作成、山西小学校避難所支援、西原村 古閑地域瓦礫撤去、 西原村ボランティアセンター本部支援、子ども支援
	16:40		三日目 ボランティア活動終了	
	23:30		就寝	
2016/5/3	6:15		起床	
	9:54		四日目 ボランティア活動開始	益城町公民館本館事務作業補助、益城町保健福祉センター避難所新規設営作業、益城町児童館物品整理、益城町総合体育館避難所ニーズ調査、山西小学校避難所支援（物品仕分け、掃除、炊き出し配膳補助）、西原村ボランティアセンター本部支援
	23:30		就寝	
2016/5/4	6:00		起床	
	8:00		玉名市にて解散式	
	8:45		多摩キャンパスに向けて出発	
2016/5/5	9:15		第二陣、国士舘大学多摩校舎に到着・解散	
2016/5/14	22:00		第三陣、大分県竹田市に向けて国士舘多摩校舎を出発	
2016/5/15	12:00		大分県竹田市ボランティアセンター到着、活動開始	
2016/5/19	13:00		活動終了、多摩キャンパスに向けて出発	
2016/5/20	3:45		第三陣、国士舘大学多摩校舎に到着・解散	

《ボランティア活動内容　一覧》

活動1日目 4月30日（土）	・西原村ボランティアセンター（西原中学校、山西小学校、河原小学校） 避難所支援（支援物資の搬入、仕分け、交通整理）、こどもの支援 ・西原村立河原小学校周辺地域 倒壊家屋等の瓦礫撤去 ・益城町ボランティアセンター（公民館福田分館） 避難所新設作業（ダンボールベッド作成） ・熊本県庁（医療救護班災害対策本部）視察 ・御船小学校　支援物資搬送（ブルーシート100枚、タオル400個）
活動2日目 5月1日（日）	・西原村ボランティアセンター（役場内柔道場、西原中学校、山西小学校） ボラセン運営支援（事務補助）、避難所支援（支援物資の搬入、仕分け、交通整理）、こどもの支援 ・西原村古閑地域 倒壊家屋等の瓦礫撤去 ・益城町ボランティアセンター（益城町公民館飯野分館） 避難所新設作業（ダンボールベッド作成、搬送） ・熊本県庁（医療救護班災害対策本部）視察
活動3日目 5月2日（月）	・西原村ボランティアセンター（山西小学校） ボラセン運営支援（事務補助）、避難所支援（炊き出し、配膳、交通整理）、 こどもの支援 ・西原村古閑地域 倒壊家屋等の瓦礫撤去 ・益城町ボランティアセンター（益城町公民館、きらめき館） 避難所新設作業（ダンボールベッド作成、搬送
活動4日目 5月3日（火）	・西原村ボランティアセンター（山西小学校） ボラセン運営支援（事務補助、おしぼり作り）、避難所支援（炊き出し、配膳、交通整理、掃除）、こどもの支援 ・西原村古閑地域　被害状況視察（雨天の為、作業中止） ・益城町ボランティアセンター（公民館、児童館、保健福祉センター、総合体育館） ・避難所新設作業（ダンボールベッド作成、搬送）、避難所ニーズ調査



《緊急事態における避難行動計画》

1. 大きな地震が発生した場合（想定：震度 6 弱以上）

(1) 国士舘大学多摩キャンパスから熊本県への移動中

① 走行中の場合は安全な場所に停車し、揺れが収まるのを待つ。

② 各車両で人員の安否確認を行い、現場指揮官に情報を集約する。

③ 現場指揮官は東京本部に安否情報を報告する。

④ 東京本部と地震に関する情報収集を行い、今後の活動計画を調整する。

⑤ 高速道路を走行中の場合、移動が可能ならば直近の PA,SA に移動する。

⑥ 地震以降の行動計画が決まり次第、行動に移す。

⑦ 車両から退避する必要がある場合は、路肩に車両を寄せて、エンジンを切り、鍵をつけたままにして退避する。

(2) 熊本県玉名市の活動拠点本部に滞在中

① 建物内にいる場合は物が倒れてこない場所、上から物が降ってこない場所に移動し、地震の身の安全を守る。

② 揺れが収まったら、ヘルメット、靴、手袋を着用し、建物の外に出る。

③ 各班で人員の安否確認を行い、現場指揮官に情報を集約する。

④ 現場指揮官は東京本部に安否情報を報告する。

⑤ 周辺を確認し、火事の発生、建物の被害状況を確認する。

⑥ その場の危険が迫っている場合は近辺の一時避難場所に集団で移動する。

⑦ 東京本部と地震に関する情報収集を行い、今後の活動計画を調整する。

⑧ 地震以降の行動計画が決まり次第、行動に移す。

※ 熊本県玉名市は海抜 33m、海岸からの距離が約 6.3km であり、津波が来る可能性は極めて低いことが予想されるが、避難時は川沿いには近づかずに避難する。

※ 地震発生時は国道 501 号線より陸側に退避しておく。

(3) ボランティア活動中

① 建物内にいる場合は物が倒れてこない場所、上から物が降ってこない場所に移動し、地震の身の安全を守る。

② 揺れが収まったら、ヘルメット、靴、手袋を着用し、建物の外に出る。

③ 各班で人員の安否確認を行い、現場指揮官に情報を集約する。

④ 現場指揮官は東京本部に安否情報を報告する。

⑤ 周辺を確認し、火事の発生、建物の被害状況を確認する。

⑥ その場の危険が迫っている場合はボランティアセンターに班ごとに移動する。

⑦ 東京本部と地震に関する情報収集を行い、今後の活動計画を調整する。

⑧ 地震以降の行動計画が決まり次第、行動に移す。

2. 阿蘇山が噴火した場合（想定：噴火警戒レベル 4 以上）

阿蘇山から最も近い活動予定場所の西原村までの距離は約 17km である。約 6,300 年前以降には赤水（直線距離 9km）付近まで溶岩流が到達した記録があるが、西原村まで到達する可能性は限りなく低い。しかし、噴火後は火山灰が降る可能性があるため、下記の行動計画に沿って避難する。

① 屋外にいる場合は車の中や建物内に退避する。
② 防塵マスク、ゴーグルを着用する。防塵マスクがない場合はマスクやハンカチ等で鼻と口を覆う。
③ 各班で人員の安否確認を行い、現場指揮官に情報を集約する。
④ 現場指揮官は東京本部に安否情報を報告する。
⑤ 降灰が始まったら、灰が収まるまで屋内にとどまる。
⑥ 屋外に出る場合はヘルメット、ゴーグル、防塵マスク、手袋を着用する。
⑦ コンタクトレンズの者は火山灰が目に入ると、結膜炎、角膜剥離を引き起こす可能性があるため、コンタクトレンズは外す。
⑧ 活動拠点本部に戻る際は班単位で車両のピックアップを待ち、集団で戻るようにする。
⑨ 教職員と連絡が取れない場合は、移動が可能ならばボランティアセンターに移動する。移動が困難な場合は、通信手段が確保できるまで屋内にとどまる。
⑩ 東京本部と火山に関する情報収集を行い、今後の活動計画を調整する。
⑪ 火山噴火以降の行動計画が決まり次第、行動に移す。

噴火での車の使用時の注意点

① 路面は灰でスリップしやすく、車の巻き上げで灰が巻き上がり視界が悪くなるため、車の使用は十分に気を付ける。
② 車の運転が必要な場合は、ゆっくりと走行し、ヘッドライトを点灯させる。
③ ワイパーを乾いた火山灰に使うとフロントガラスを傷つけるのでウォッシャー液を多めに使い洗い流す。
④ また降灰が多い場合は数十メートルの走行単位でフロントガラスの清掃作業が必要になる。
⑤ エンジン部分まで降灰が入り込むためエンジン性能に気を遣う。

《国士舘大学　ボランティア活動の心得》

・ 余震に気をつけて活動する（建物の中など）

・ 体調が悪い場合は無理をしないで報告する

・ 活動中は安全管理をしっかりと行い、自分の身は自分で守る（釘など）

・ 相手の話を共感的に聞く（傾聴する）

・ 相手の感情に巻き込まれ過度な哀れみや同情をしない（過度に励まさない）

・ 子どもと遊ぶときなどは過度に喜ばせようとしない

・ 「ボランティアをしてあげる」という気持ちではなく、活動を通して、学ばせてもらっているという意識で謙虚な姿勢で活動に望む

・ 挨拶は自分からすすんで行い、周囲とのコミュニケーションを図る

・ ボランティア活動の運営について十分に理解して、批判はしない

・ SNS の使用方法に注意する

・ 活動中に知り得た情報は絶対に漏らさない

・ 今何をやればいいのか、自分のできることを探し、自分で考えて行動することを心がける

・ 被災者が自分たちでやる仕事を取らない

・ 出来ないことは「出来ません」とはっきり断る

・ 活動中に問題が起きたら、迅速にメンバーに報告・連絡・相談を行う

・ 治安の悪化を鑑み、集団行動を徹底し、個人での単独行動は厳に慎む

《ボランティア活動 装備一覧表》

装備名	個数	備　考
タオル（作業用）	4	汗をかくので多めに持ってくる
作業用マスク（防塵マスク）	4	作業日ごとに
帽子（キャップ）	1	ヘルメットは支給
長靴（作業靴）	1	踏み抜き防止中敷が必要（別売り有り）
作業着　上下（長袖、長ズボン）	2	スポ医はオレンジ　袖が長いもの
着替え	4	汗をかくので多めに持ってくる
靴下	4	厚手のもの
雨具（カッパ）	1	雨時に行動出来るセパレートタイプ
洗面用具	1	入浴時
水筒（ペットボトル）	1	活動時
常備薬	適量	
懐中電灯	1	ヘッドライトがよい
ウエットテッシュ・ボディーペーパー	3	
ファーストエイドキッド	1	絆創膏など（個人用）
筆記用具・ノート	1	
行動食	1	飴やカロリーメイトなど
腕時計	1	時間厳守
軍手・作業グローブ・ゴム軍手	3	活動時に使用
雑巾	2	
デイバック	1	
作業用ゴーグル	1	
ビニール袋	２～	
新聞紙	１～	
サンダル	1	
電池式携帯充電器	1	

平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

［活動記録写真集］

災害派遣第 1 陣

被害状況の確認及び支援物資運搬活動

熊本市街の様子
（パンケーキクラッシュを起こした建物）

御船小避難所において水・
食料の引き渡しを行う様子

ブルーシート・食料・水を配布した

御船小学校の避難所内部の様子

平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

［活動記録写真集］

災害派遣第２陣

被害状況の確認及び支援物資運搬活動

西原村山西小学校周辺の街の様子

西原村立山西小学校の外観

避難所内の様子

支援物資の仕分け作業を行う様子

支援物資の移動を行う様子

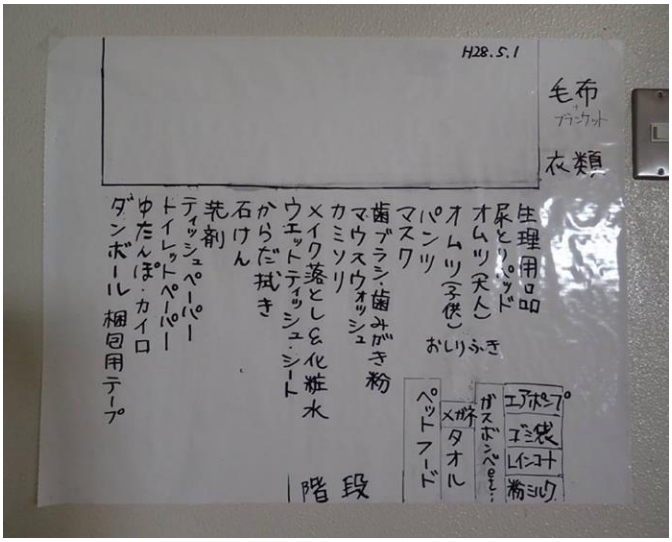
支援物資を整理後、通路の確保や支援物資の生活スペースへの落下を回避した

支援物資の中にあったダンボールベットを組み立てて診療所に配置した

体育館のミーティングルームの整理を行い、医療診療所を校舎から体育館に移動した

診療所には仕切りを設け、授乳室も同じ場所に設置された

地域の方と協力し、炊き出しを実施した



支援物資を集積する場所の表示を作成した

避難所内のトイレの清掃作業の様子

屋根に残った瓦を地上に降ろす作業の様子

学生たちが集積した瓦礫をトラックに積み込む様子

瓦礫の除去を行い、崖崩れが進行しないように、ブルーシートをかけている様子

瓦がなくなった屋根にブルーシートをかける作業の様子

地震の影響で道路が損壊・
崩落している様子

滞在拠点として貸していただいた河崎公民館

西原中学校の避難所にて、こどもと
コミュニケーションをとる様子

西原村立生涯学習センターに設置された
災害ボランティアセンター本部

益城町公民館の避難所にて、支援物資の
ダンボールを作成

作成したダンボールベッドを配置した様子

平成 28 年（2016 年）熊本地震への被災地支援活動

［活動記録写真集］

災害派遣第３陣

大分県竹田市　竹田ベースキャンプ運営支援

国士舘大学多摩キャンパスを出発する様子

竹田ベースキャンプの様子
（大分県竹田市　旧竹田市荻支所）

竹田ベースキャンプ　内部の様子

竹田市社会福祉協議会のスタッフと
調整を行う様子

朝のスタッフミーティングの様子

熊本県外から訪れたボランティアを南阿蘇行きのシャトルバスへ案内する様子

南阿蘇村の地震で損壊した家屋

長けたベースキャンプでの総務作業の様子

竹田市社会福祉協議会スタッフと
竹田ベースキャンプにて